BNS

Beginning Novels Series

etose

Illust：りょう@涼

ゲーマーが異世界魂転してハーレム人生へコンティニューするそうです

VOLUME 2

おねショタ好き推奨

試し読み版

CONTENTS

第一話　少年と作戦会議　005
閑　話　誕生日おっぱい事件　019
閑　話　悪戯　031
第二話　少年と初戦　038
閑　話　少女の誘惑　050
第三話　少年と準決勝　060
第四話　少年と決勝戦　069
閑　話　屋上遊戯　078
第五話　少年とMVP連合　083
閑　話　日常茶飯事　097
閑　話　裏切り者　102
第六話　少年と最終戦　110
第七話　少年と優勝祝勝会　126
第八話　少年とメル　138
第九話　少年とカミラ　155
第十話　少年とメル2　179
閑　話　神様とアリア　199
第十一話　少年と一人旅　205
第十二話　少年とアンポワーズ　210
第十三話　少年と穴掘り　219
第十四話　少年とゴールドラッシュ　226
第十五話　少年と迷宮内部　236
第十六話　少年と不死の王　246
第十七話　少年とオクタヴィア　261
第十八話　少年とお宝の使用計画　278
第十九話　少年と安らぎの一時　287
第二十話　少年と一昼家　298
第二十一話　少年と屋敷とメイフィスの街　319
第二十二話　少年と商店街　333
第二十三話　少年とやりすぎの結果　345
第二十四話　少年と晴れた冬の日　353
第二十五話　少年と冬休み最後の夜　363
閑　話　神様と戦力増強　371

The gamers to reincarnate!

第一話　少年と作戦会議

夏季休暇が明け、久しぶりにクラスメイトたちと顔を合わせた。真っ黒に日焼けしている人もいれば、垢抜けたような人もいる。一夏で人は大きく成長できるようだ。中でもノーマンは突き抜けていた。本職のボディビルダーのようだ。焼けた肌に白い歯。筋肉も二割増しになっている。存在感が異常なまでに上がっていた。

「よぉ！　久しぶりだなウェイン！　元気にしてたか？」

「久しぶりノーマン！　また筋肉が凄いことになってるね！　この大胸筋なんてたまらないじゃないか！」

「ああ、そうだろう？　フィーナ教官に助言をもらって注意しながら鍛えた結果だ！　見てくれだけじゃなくパワーも倍は上がったんだ！　今ならパイプ椅子くらいなら軽く曲げれるぜ？」

本当にできるんだとばかりに、辺りをキョロキョロ探っている。できなかったことができるようになったとき、人に見てもらいたい気持ちはよくわかる。

「それは凄い！　でもパイプ椅子もただじゃないんだからやっちゃだめだよ？」

「……母親みたいなこと言うのな」

「ところで、あのモヒカンは……エドワード？」

「ああ、前はリーゼントだったが今回はモヒカンなんだな。ああいうのが似合うなあいつ」

教室の隅っこで一人舌打ちを連発しているエドワードは、毛を逆立たせ重力にまで反発しだしていた。より近づきがたい風貌になっている。

「えぇ？　前リーゼントだった？　ずっと坊主だったじゃない」

「なに言ってるんだ。バスでお前に喧嘩売ってたとき、リーゼントだったろ？」

バス……バスとはいつの話だろうか。

「あっ！　入学前の⁉　あれってエドワードだったの？　違う人だと思ってた！」

「ふふっ、だがきっと明日には坊主になってるぞ。賭

けてもいい」
　ニヒルに笑ったノーマンが、先を見据えて勝負を仕掛けてきた。理由を訪ねてみると、エドワードの寮部屋にはノーマンが所属しているボディビル部の先輩が集まっているらしく、その人たちはチャラけた輩が大嫌いなのだそうだ。分の悪い勝負だが、負けてもなにかあるわけでもないので、とりあえず勝負には乗ってみた。
（筋肉に埋もれる寮生活……考えただけで……あれ？　嫌じゃないかも）
　変な想像をしていたらお母さんが入ってきた。
「久しぶりだな。見た目が随分と変わった奴が多いようだが……各自鍛錬に励んでいたか？　またこれから私がどれだけ強くなったかを見てやる。すぐに武道場へ移動だ！」
　全員の晴れ晴れとした顔が一転にしてゲリラ豪雨の如く青ざめた。武道場に向けて死の行軍が開始される。
　結果から言おう。褒められたのはノーマンだけだ。残りの生徒はまたもや死屍累々。「気合を引き締め直せ！」と、かなりの檄が飛ばされていた。
　エドワードはその場で坊主にされた。毛を毟り取られ、凄惨な姿になっていた。明日まで持たなかった。悪い意味でお母さんに注目されているだけはある。ノーマンに「賭けは僕の勝ちだね！」と、言うと顔を歪ませていた。
　褒められたノーマンは入学当時一歩も動かせないでいたが、今回は武道場の端まで押しきった。クールなお母さんモードにしては珍しく、笑顔でニッコリと笑い「今後も鍛錬に励め」と、ノーマンに言っていた。その光景に涙が出そうになった。
　そして僕……お母さんに勝ちました。
　勝てた要因として、フリーダが正しい光の魔法を教えてくれたことが大きいと思う。素質さえあれば子供でさえ習得できる技らしいのだが、今の僕にはこれでさえギリギリだった。フリーダから教えてもらった魔

法、それは光を集める魔法だった。
以前通り飛び込んできたお母さんは、僕を抱きしめにかかった。力量を測るという名のただのハグだ。むしろ歓迎とばかりに迎え入れたいところだったが、寸前で光の魔法をお母さんへと向けて発動させた。
以前使用したことがある、石に光を集めて相手に投げつけたように、今度は小さな光の玉を投げつけた。弱くチカッとした光だったが、それでも動きを制限させることに成功した。溜める必要もなく、発動は早い。
視界を隠す仕草に紛れ、無防備な背中に回りこむと、首を締めるふりをして「ママ大好き」と、耳元で呟いた。たったこれだけでお母さんは力を抜かしてしまった。
一瞬の結果に、クラス全員が唖然としていた。小細工ありを卑怯だと言う者は……きっといないだろう。
立ち上がる間際に「勝ったからあとでご褒美ちょうだいね？」と、告げると真っ赤な顔をしてお母さんは頷いていた。
その日を境に、僕は『クラス最強』の称号を手に入れた。
そこからは十二月の大会に向けて、より実践的な動きの訓練になった。
日々の講義は常に分隊行動。迅速に行動を起こすため、とにかくチームワークを徹底的に鍛えられた。これには一匹狼の坊主頭であるエドワードも輪を乱してはいられないようだった。嫌々ながらも行動を共にしている。しかし、いかんせん協調性がなく、クラスで浮いた状態なのは変わらなかった。
ある日の休み時間、これまた久しぶりにシャロンに遭遇した。シャロンは相変わらず白く綺麗だった。美しいと言いたい。言ってしまおうか。……だが、顔色は良くない。
「シャロン！　久しぶり、元気にしてた？」
「あっ……ええ」
「どうしたの？　なにかあった？」
「……お父様にちょっと……それと、ウェイン。あなたに負けないから……」

不思議な布告を言い残してシャロンは立ち去ってしまった。

どうしたというのだろうか。世間話すらろくに交わせない仲にちょっとだけ気分が滅入ってしまった。クラスが違うだけでこんなにも交流がしづらいとは……。

＊

クラス対抗戦が近くなり、放課後は団結を深めるために、クラス全員で自主訓練をすることにした。もちろんエドワードだけは参加してこない。自主性を慮るのは大事なことだ。無理に引き止めはしなかった。

そんな野郎は放っておき、クラスの状況を分析する。僕たちのクラスは鉄壁と言っても良いくらいに守りに長けている。防御陣地構築の腕なら学年随一だろう。これは良いことなのか悪いことなのか、僕には判断しかねる問題だった。なぜなら、他のクラスは3：2：2：1くらいでストライダーが比較的多くメディックが少ないのに、我がクラスは1：2：3：2という割合で穴掘り屋……もといエンジニアが多いのだ。エンジニアやメディックだからということで攻撃ができないわけではないのだが、いかんせん総合的な火力が違う。果たしてこの面子（メンツ）で本番ではどうするのか。全員で作戦を練る必要があった。

「ねぇ、ノーマン。試合はどんな感じなんだっけ？」

一先（ひとま）ずクラスへと全員が集い、輪を作るように各々が話し合いをしている。

「お互いに自軍にある旗を守るルールだな。相手に触らせないように攻防し合う。防御と攻撃をどんな比率にするかはクラスの自由で、縦五〇〇メートル×横五〇〇メートルくらいが平均だっけか？　広大なフィールドに自由に陣地を配置する。そこでお互いの旗を奪い合うわけだな。山二つ使って争ったこともあるらしい。フィールド内にある物は自由に利用をしてよく、自分たちで壁を作り上げてもいいし、天然の要害を利用してもいいし……まっ、山か平地かで全然変わるな。発表されるのはだいぶ先だ」

自分の中にあるフラッグ戦の知識と、ノーマンに教

えてもらった知識を擦り合わせてゆく。
　ノーマンが言うように、フラッグ戦は『守る』試合だ。簡単な防御陣地でも形成できれば、守るに易く攻めるに難い。そうなれば、このクラスは他のクラスに比べて有利ということになる。
「ウチってストライダーが少ないよね。これってもしかして有利なの？」
「そうだなぁ……俺たちが勝つには……フィールド全体に穴掘ればいいんじゃないか？」
「それはいい作戦だね！　頑張ってエンジニアたち!!」
　クラスのエンジニアたちからブーイングが巻き起こった。
　やはり想像していたように、このクラスのバランスには難があるようだった。結局、いくら守っても攻めなければ勝てないのだ。どう考えても攻めに人数を割く必要がある。数少ないストライダーを前線に行かせた場合、他のカバーが難しい。偵察、斥候、攻略。これらをバランスよくやらなければならない。
「穴を掘りたいのはノーマンだけらしいね」
「まぁ、やっていいなら俺は掘り続けるが……。わかっていたことだが部隊編成が大事になるな。四人一組で考えると、五チームだな」
　クラスの人数は総勢二十人。綺麗に割り切れる。
「大事なストライダーを満遍なく入れると一チーム一人だね」
「まぁ、撃たれてもメディックが近づけば回復できるからな。リサイクルを心がけよう」
　今度は数少ないストライダーからブーイングがあがった。
「まだまだ時間はある。大筋だけは決めていこう。まずは全体のリーダーというか指揮を執る者だが……」
「ノーマンしかいないね」
　これには全員が頷いた。
「あ～……まぁ、仕様がないな。やりたい奴がいれば喜んで代わるから言ってこいよ。では、そうだな……。ウェイン、お前が攻めの要（かなめ）だ」
　突然の名指しに、思わずキョトンとしてしまった。

「――え？　僕はメディックだよ？」
「他の奴らを見てみろ。誰もお前をただのメディックとは見てないぞ」
　周りを見回すと「うんうん」と全員が頷いている。
「メディックに最前線へ行って戦えというの？　僕は治すのが専門だよ？　このクラスは非道な人たちばかりなの？」
「フィーナ教官に勝ったお前が言うな。仕方がないだろう攻め手が少ないんだから」
　ごもっともなことだが、あれはあくまで油断していたお母さんに小細工をしたから勝利したのであって、真っ向からいけば勝てるべくもない。……だが、嫌々言ってても始まらない。
「じゃあせめて僕のチームだけは優先して人を選ばせてよ！」
「ああ、それくらい良いぞ」
「じゃあ、ノイちゃんとアンさんとカミラさん！」
「……おい。ちゃんと選べ。完全にお前の好みで選んでるだろ」
　見事なまでに女生徒。それに胸が大きい。
「アンはメディックだし、プロフェッショナルを二名もいらんだろ。っていうかストライダーが大事って言ってたのはお前だろ」
　ＮＧが出たので再考する。とりあえずアンさんはどうあれ駄目だろう。となると二人、ノイちゃんとカミラさん。
　共に年上の女性であり、どっちかといえばカミラさんのほうが胸はでかい。クールな印象が初期のエドナさんに似ていて高評価だ。対するノイちゃんは受け答えが丁寧で年齢もカミラさんより若い。僕にも気兼ねなく声をかけてくれる。
「究極の選択だ……。カミラさんも捨てがたいけど……将来性にかけてノイちゃん！」
「オイ！　真面目に選べよ！　お前の活躍次第でクラスの勝敗が分かれるんだぞ！」
「そんなこと言うならカミラさんもちょうだいよ！　二人が僕を挟んでくれるなら死んだって生き返る！」
　ノイちゃんとカミラさんは顔を赤くしている。掛け

値なしの本音だ。良いではないかクワトロおっぱい。
「巨乳好きのエロガキだなお前は！　……仕方ない。ノイはお前のチームだ。あとストライダーとエンジニアから一人ずつ選べ」
　クラスの皆をぐるっと眺め回す。僕のやりたいこと、そしてクラスのためにできそうなこと。……再び思案する。
「う～ん……ノイちゃんだけでいいや！」
「……正気か？　本当に頼りにしてるんだぞ？」
「うん、真面目にやるよ。せっかく皆で頑張ろうって言ってるのに申し訳ないけど、少数精鋭で挑もうかなって。基本的にはノイちゃんに後方への連絡係をしてもらう」
「絶対にチームプレーをしろってわけじゃないから、それでも構わないが……メディックのお前は負傷したら回復できないんだぞ？　最前線に他のメディックは行きにくいから、当てられたらほとんどアウトになっちまう」
「大丈夫！　死ぬときはノイちゃんに抱かれて終わるから！」
　頭の中には始まりから終わりまでしっかりと流れができている。できればドラマチックに果てたいものだ。
「そうかい、お幸せに。では、残りの奴らも班分けするぞ」
　適当なことを言っていたら、完全に蚊帳の外に置かれてしまった。ノイちゃんが近づいてくる。
「あの、本当に二人だけで大丈夫なんですか？」
　緩くカールした薄茶色の髪にメガネがよく似合う。16歳にしては大きな胸。これもドナ先生を超えるやもしれない逸材の一人だ。
「ノイちゃんが隣にいてくれたら百人力だよ！　僕の傍にずっといてね？　公私共に」
「それは困ります。それを誓えるほどウェイン君を好きではありません」
　優しく微笑む表情に、温和な対応。喋るのが楽しくなる。
「残念。好感度を上げるためにも是非とも頑張るね！」
「頑張ってください。応援してますよ。ですが、本当

に私だけでいいのですか？　それに連絡だけで？」
「もちろん他にもしてもらうとは思うけど、メインはそうだね。それに、たしかカミラさんとノイちゃんって『風の音』が聞けたよね？」
「ええ、声を風に乗せて伝えることもできます」
　プロフェッショナルの中でも比較的珍しい能力だ。声を風に乗せて遠くにいる味方に届けることができる。聞き取る側も同じ能力が必要なために、難点はあれども利は多い。
「実はね……。――僕もなんだ」
「――えっ⁉」
　視線の先のカミラさんも驚いている。突然僕の声が耳に入ったからだろう。
「へへっ、これで秘密のお話ができるね！　どうしようワクワクしてきた！　これがあれば三人でつぶさに戦況が確認できるね‼」
「ウェイン君がこれできるなら、私は不要じゃないですか……」
「そんなことないよ！　一人じゃできないことは多いもの！　目が多いほど警戒もできるし、状況に迷わなくなる。少数ならではの攻めをしなくちゃいけないからね！　ノイちゃんと僕はこれからスニーキングの練習だ。目指せ零人撃破攻略！」
　拳を突き上げる形で、有り余るやる気をノイちゃんに示した。
「そんなことできるわけないじゃないですか……」
　現実思考なノイちゃんは、やれやれといった様子で目頭を押さえている。普通に考えればそうなのだろうが、僕たちはそれをしなければ勝機はないのだ。
「お？　言ったね？　賭ける？　お言葉ですが、正気じゃ勝機は得られないよ？　――おっ、上手いこと言えた！」
「ハイハイ。それでやる気出してくれるなら賭けてもいいですけど……エッチなことは駄目ですよ？」
「むむっ、残念。じゃあカミラさんにエッチなことを……」
　小さな声で「ダメだ」と、返事が来た。
「なんにせよ、達成できたらの話です。期待してます

よ」

あからさまに期待なんてしていない様子だった。肝心なアタッカーの数が少ないのだ。勝利さえ難しと考えているのだろう。健闘できたら十分という感じかもしれない。でも、残念……僕はやると言ったらやるのだ。エッチなことは封じられたが、ギリギリを攻めたいと思う。勝利の特権は僕の手に！

賑やかな作戦会議が終わり、班ごとの練習となった。

二人で匍匐前進の訓練をしてるときに、あることが気になってしまった。ズリズリと這いつくばりながら進んでくるノイちゃん。その姿は非常に辛そうだ。とても圧迫感がある。「胸痛くないの？」と、聞いてみたら案の定「痛くて泣きそうです」と、言ってきたので「メディックに任せて！」と、言ってみたら蔑みのジト目をされてしまった。新たなノイちゃんの一面が見れて嬉しかった。そんな感じで二人の交流を深めていった。

大会が近くなるにつれクラスの士気が日に日に高まっていく。

＊

十二月になり大会まであと数日というところで、今回の開催場所が発表された。大まかな地図が配布され、赤く括られた枠内が戦場ということらしく、広大な土地であるようだった。情報の少ない地図とにらめっこしていると、決戦場所の一部写真を見せてもらえた。写真には生い茂る木が乱立し、地面には膝程もありそうな雑草が生えていた。

その光景に皆が一様にして頭を抱えた。僕たちは少数精鋭での隠密奇襲作戦を行おうとしているので、隠れるには良いが派手に動けばすぐにバレかねない様子に思わず頭を抱えてしまったのだ。

他にも、大会で使用される武具の紹介があった。お母さんが教壇に立ち、一つ一つ使用方法を説明してくれる。

武器は大会用に作られた模擬短剣に短杖・一般杖・大型杖の四つ。この中から自由に選択する。

本来の魔弾にはその人に合わせた属性が乗るが、今回の武器では属性が乗ったりはしないように加工がなされている。例えばストライダーであるならば赤い炎の魔弾が出るが、当たっても火は点かない。模擬魔法弾が発射されるようだ。

防具は防魔弾用のチョッキが用意されていた。それには短剣の刺突や魔法弾が当たると赤く染まる特殊なプレートが張られていた。

頭、胸、背中に被弾した場合は即座に戦闘不能になる。両手を攻撃されても動くことはできるが、攻撃はできなくなる。片足に被弾した場合も動けるが、両足に当てられた場合はその場で行動不能になる。試合はトーナメント制、時間は無制限。相手の旗を取るか、自軍の旗を取られるまで試合は終わらない。それでも長くても一試合二時間程度らしい。

武器の短杖は、魔弾が小さく連射ができない。

一般杖は軍に正式採用されている物と同じで連射が効く。これはストライダーであるならば他の人より連射が利く。だが、動き回るには少々重く、長い頭身のため取り回しがしづらい。特に、戦闘型のプロフェッショナルによる高速近接攻撃には対応がしにくい。

そして、一番の大物である大型杖は二人以上での使用になる。空に向かって大きな魔弾を撃ち放ち、自動落下で着弾爆破。物にぶつかると四方八方に魔弾が散らばる。塹壕や籠城対策に使えるものだ。運用に人手はかかるが、破壊力は図抜けている。

杖から出す攻撃以外にも、強烈な打撃や風圧による転倒等でも当たり判定とされることがあるため、肉弾戦のみでもありである。……ということで最強はエドナさんで決まりだ。

昨年のエドナさん率いる一年Aクラスは完全勝利をしたようだ。

エドナさん率いるAクラスと戦う場合、対戦相手は専守防衛がデフォルトらしい。あまりに圧倒的すぎたため、次戦ではエドナさん抜きでホリーさん主導の下戦ったらしいが、それでも敗退者もなく勝ちを収めたようだ。本当に化け物ぞろいである。学年が違って本当に助かった。

大会当日は全員が張り切って攻防するため、撃ち合いになると実際の戦場のように派手で熱くなるようだ。
メイフィス軍学校のフラッグ大会は、世間一般ではお祭りの一つになっているらしく、近くの住人はもちろん、遠くの街からも見学しに来る人がいる。それに軍関係者も当たり前に来る。将来を見据える生徒はそれだけで十分に熱が入る。本人たちには気づかない所から撮影され、中継もされるようで、見られているという心境も熱を上げる要因の一つになっている。
話を聞いているだけで、心がそわそわとしだしてしまった。
戦場が確定し、改めてクラス総出で作戦会議が開かれた。
「今回のBクラスの目標は……一回戦突破でいいか？」
開口一番、ノーマンにしては珍しく弱音が飛び出してきた。
「なんで⁉　せっかくなんだから優勝でしょう‼」
気炎を揚げるのは僕だけで、誰も反応を示さない。お通夜状態だ。
「俺たちは少数精鋭アタックの耐久型チームだよな？　足元が見づらいフィールドでは落とし穴はとても有効だ。それを多く設置できる俺たちの守備力はなかなかだと思う。だが、それは相手にも言える。攻めにくく守りやすい。軽く動くだけで草が動いてしまうぞ……。プロフェッショナルなら誤魔化しながら動けそうだが……。ウェインはメディックじゃないか」
「それを承知で僕を前線に送ったんでしょ？」
なにを今更と言いたくなったが、事実に相違ない。
「なにか対策を考えてあるのか？」
「いや、ないけど？　でも負けたと決まったわけじゃないでしょ！」
「それはそうだが……勝利は難しそうだな……」
「なにさなにさ！　みんなして！　――いいの？　優勝したらノイちゃんがおっぱい揉ませてくれるんだよ？？」
数名の男子がぴくりと反応した。
「そんなこと約束していません！　適当なことを言わ

ないでください！」
「冗談です……凄い剣幕で怒らないでください……。でも、この状況で活躍したら女の子たちは褒めてくれるよね⁉　称えてくれるよね⁉」
「それは内容次第ですが……。まぁ、そうでしょうね」
またもや数名の男子がぴくりと反応した。
（――これはイケる）
ぼそぼそっと喋り、カミラさんにお願いする。
待つこと数秒、顔を赤くしたカミラさんが、物凄い棒読みで男子たちに発破をかけてくれた。
「ほら！　普段はクールなカミラさんが勇気付けてくれてる！　男ならヤるしかないでしょ！」
男子の目に炎が宿った。
「勝てばモテる！　勝てば彼女ができるかもよ⁉　優勝目指すぞ――‼」
野太い雄叫びがあがり、男子の士気が回復した。
「単純だなお前ら……」
「なんだよ！　ノーマンだってモテたいでしょ！」
「いや、俺は……」
「なに紳士ぶってんだ筋肉ダルマ！　その筋肉で魔弾を弾き飛ばせ‼」
「お、おぅ……！」
勢いでだが、ノーマンも引きながら賛同してくれた。
あとは女子たちである。……どうしたものか……。
「ノイちゃん。女の子たちはなにでテンションあげるだろう？」
「難しいですね。各々好きなものが違います」
「ノイちゃんはなにがいい？」
「そうですね……学食の水曜限定五食の『幻の特濃プリン』でしょうか」
「なるほど……では勝ったら男子が『幻の特濃プリン』を奢ってくれるぞー‼」
半分の女子が「おー‼」と手を掲げた。……残り半分は？　えっと……。
「ホリーさんの使ってるタオルがもらえるぞ！」
「――うぉぉおおおおおおおおおおおお！！！！」
残りの女子が雄叫びをあげた。一番勇ましかった。
こんなにいるのかホリー親衛隊。――それと一部男

子混ざるな！

決意新たに大会までみっちりと訓練を重ねた。団結力も高まった。

そして迎える大会当日……。

第四話　少年と決勝戦

一年決勝戦当日。本日も一般客席は大賑わいだ。朝だというのにお酒を飲んでいる人もいる。

一応授業ということになるはずなのだが、上級生や既に敗北してしまった一年の他クラスの生徒は、観客に交じって祭りの雰囲気を楽しんでいた。早く僕もそちらに行きたい。

試合開始も近くなり、AクラスとBクラスにお呼びがかかった。

この試合に勝てば優勝になる。ノーマン含み、皆のやる気は最高潮だ。

もちろん僕もやる気十分だ。なにせ、部屋のお姉様たちが勝利したらご褒美をくれるというのだ。前回の試合同様、一人でも勝ちに行く所存である。

「ウェイン！　今日も頼むぞ！　やはりお前が勝利へのキーマンだからな！　ノイもサポートを頼んだぞ!!」

「はい。前回は失敗してしまいましたが、今日は頑張りますよ！」

ノイちゃんもやる気に満ち溢れている。

「これが最後だ！　死ぬ気で頑張るよ!!　Aクラスを倒して優勝するぞ――!!」

「「「おー!!!」」」

僕の掛け声にBクラスの心が一つになる。……一人以外。

戦闘開始の合図があがる。

「作戦は昨日決めた通りだ。守りを固めて迎え撃つ！偵察はしなくていい。全力で防御陣地を作り上げるぞ！」

エンジニアたちが魔力全開で陣地作成に走っていく。

昨日決めた作戦は『徹底防御』。僕の攻撃頼みの綱渡り作戦だが、皆はイケると踏んでいた。期待に応えなければならない。他の皆は陣地にて全力で守り、相手を疲れさせたところで、反撃に出る。僕とノイちゃんは遊撃だ。相手を見つけ次第デストロイに走る。

「よし！　ノイちゃん、僕たちも行こうか‼」
「はい！」
ノイちゃんと二人、林の中へ飛び込んだ……。
（……まただよ。……もういいよ）
昨日見た光景がそのまま蘇る。デジャヴだ。悪夢だ。嘘だと言って欲しい。
「ノイちゃん……もう絶対スパイだよ……。射殺してよ」
「ええ……お願いがあります。私がやったという証拠を残したくないので短杖を貸してください」
今日もまた、エドワードがくっついてきていた。昨日皆にボロクソに言われたのにまったく懲りてないようだ。チキンハートなのに強心臓とはどういうことなのだろうか。
「相手にしたくないけど……なんでまたついてきてるか聞いてくれる？」
「えぇ～、嫌ですよぉ～……もうエドワードさんと話をしたくないんですが……」
昨日の出来事以降、ノイちゃんのエドワード株は既にマイナスに突入している。なおも下落中だ。
手を合わせ「お願い！」と、拝み倒すと「はぁ……」と、ため息をこぼしながらノイちゃんはエドワードから事情を聞き出しにいった。
少し経つとノイちゃんからピリピリとした空気を感じる。相当苛立っているご様子だ。
ノイちゃんから風の音で返事があった。
「ウェイン君……エドワードを殺しましょう」
ゾワッとした寒気が僕を襲った。ひっそりと伝わる言葉の重みが真剣味を帯びていた。
既に呼び捨てになっている。これはもう怒り心頭だ。
「うん。撃っていいよ！　で、なんだって？」
「昨日はお前がミスをしたからやられたんだ。今日はそんなヘマはしない。……だそうです」
昨日ノーマンに責められていたときは、舌打ちだけでなにも言い返さなかったのに、年下や女相手だとこうなる。さすがエドワード。
「……うん、もはやなにも言えないね」
このままエドワードを連れ回しては間違いなく昨日

の二の舞いだろう。どうにか切り離したい。
「作戦変更が必要だね。エドワードが来ると致命的なミスが起こりかねない。僕たちは優勝がしたいんだ。ノイちゃんは急いで陣地まで戻ろう。僕は一人で行動するよ。走りだせば追ってこれないでしょ。そうなれば諦めて一人で動くか、陣地に戻るよね？」
「せっかく、昨日の汚名を雪ぐチャンスだったのに……」
「あはは、ノイちゃんは最初から最高のパートナーだったよ！　ハードラックに追いつかれちまっただけさ……」
「いったいなにキャラなんですか……わかりました。では、急いで戻ります。一人になりますが、頑張ってくださいね！」
「うん、勝利のために！」
「ええ、勝利のために！」
　ノイちゃんと僕は、拳を掲げると瞬時に反対方向へと走りだす。エドワードは何事かとキョロキョロと僕たちを見ていた。

　このあとあいつがどうするか僕は知らない。一目散に緑生い茂る草木の群れに飛び込んだ。
　ある程度走ると、敵斥候部隊を発見した。三人だ。お互いをカバーし合うようにキョロキョロしながら索敵している。初戦のときのような、一人偵察ではないようだ。僕を警戒しているのだろうか？
　三角の形で索敵している相手目がけ、木の上から中心に舞い降りる。
　気配、それに物音に気づき、全員が僕に杖を向けた。しかし、既に全員が背中・それに胸にヒットマークが出ている。時魔法を駆使した寸分の狂いもない斬撃だ。狙いは外さない。
　Aクラスの斥候兵が「クソッ！」と吐き捨てている。まずは三人。この調子で人数を削っていきたい。

　縦横無尽とはいかないが、ある程度走っていると今度は逆に襲われてしまった。
　乱立する木々の間、ぽっかりと開けた空間だ。短い草だけが伸びており、視界は広い。まさかここで、ナ

イフで奇襲されるとは思わなかった。突然の攻撃だったが、普段の訓練が効いたのだろうか、気配を察すると体を捻りギリギリで避けられた。すれ違い様のいい匂い。

相手の姿を視界に捉える。セシルさんだ。

セシルさんと相対する……背面にも気配を感じる。

「ぼぼんっ」という一般杖の連射音が響いた。

音だけを頼りに飛び退き、回避する。先ほどまで立っていた場所に赤い魔弾が撃ち込まれる。セシルさんだけではなかった。シャロンまでいた。

「シャロンまで……！　僕が奇襲したかったのに……」

「残念でしたね。シャロンが誘導してくれましたよ」

「誘導？　なんで僕の位置がわかったの？」

シャロンに問いかけるが、目を逸らし、顔を若干赤くしたまま答えてくれない。

「それは決着がついてからのお楽しみでは？」

セシルさんがナイフを構える。隙が見えず、一筋縄ではいかないようだ。さらに、相手は援護兵のシャロンまでいる。

「2対1で襲いかかるなんて酷いな～！　僕はメディックだよ？」

「昨日あれだけの活躍をしながら……。アレシア様に言われているのでここで足止めさせていただきます」

「足止め目的なの？　じゃあせっかくだからお話しようよ。僕もセシルさんとお話したかったんだよね」

「……？　なにが目的ですか？　なにか仕掛けでも……？」

辺りを見回し、警戒をしている。そんなことをしても周りに人はいない。

「いや？　ただ単にセシルさんと話す機会がなかったから、せっかくだから誘ってみただけだよ？」

「……なら私に勝てばその機会を与えましょう」

言ってみるものだ。セシルさんと仲良くなるチャンスを得た。全力で当たらせていただこう。

「僕は賭け事に強いんだよ？　そうと決まれば……」

光魔法をシャロンに当て、背後からの射撃に牽制をする。

瞬時に特攻を仕掛けるが、セシルさんに焦った様子は見られない。どんな状況でも表情を変えない姿は、やはりどこかお母さんに似ている。

突き出すナイフを他所に、セシルさんは打撃戦を仕掛けてきた。しなるような回し蹴りはキレがありとても速い。こうなってはガードするしかない。

腕に響く衝撃は、骨身に響く程に威力がある。だが、僕の師匠は炎髪の魔女に鉄仮面の女《クリューエル》。この程度ではどうということもない。練習では何度骨が折れたかと勘違いしたか……。

「……ふむぅ、なかなかだね。お母さんに習えばもっと強くなりそうだ」

「あなたも打たれ強いですね。本気で蹴りつけたのですが」

「ははっ、体力には自信があってね。――せいっ！」

再び防具のヒット判定を狙いナイフを突き出す。

無数の突きを手で払い、体を捻り、腕で弾かれる。見事なものだ。動体視力も良いらしい。……ならばっ！

時魔法を使用する。セシルさんの動きがゆっくりとなる。この世界に対応できるのは相当な猛者だけだ。生憎セシルさんはその頂にはまだ到達していない。ナイフの突きを手で弾こうとしているようだが、僕にはその動きがつぶさにわかる。胴体を狙った軌道を急に変化させた。

セシルさんの無表情の顔が少しだけ動いた。

ナイフはセシルさんの腕にぶつかった。片腕が使用不能になる。残りの片腕で僕のナイフを捌くしかなくなった。

「――っ！」

自力の体術勝負では負けているだろう。それはセシルさんも承知しているはず、なのに技術の劣っている者に一本取られた。これはプライドに響いただろう。だが、チームの勝利のためにも、僕の野望のためにも、ここは負けられない。

今度も胴体を狙いナイフを突き入れる。先ほどの流れを恐れているのか、体を捻って避けようとしている。ならばと、足に狙いを変え、逃げられる寸前に振り払い、腿の部分を掠めた。これで片足、それに片腕が使

第五話　少年とＭＶＰ連合

こんなことがあっていいのだろうか。試合のキーマンはあの『エドワード』であった。

エドワードは僕たちに置き去りにされたあと、一人で行動を開始した。ここで陣地に戻らない辺り、エドワードの人間性が現れている。そして、やることもエドワードらしく守りでもなく攻めでもない……見事なまでの囮役をやってのけた。

行動開始直後にＡクラスの斥候部隊に見つかり、派手に追いかけ回される。相手からすると、絶好の鴨だ。即座に倒したくなる動きをする。逃げるのも下手くそだからだろう。だが、弱気なことに関しては一人前だ。決して撃ち返したりはしなかったらしい。

逃げに徹して絶妙な間隔で逃げ回り、見事なハイドアンドシークを決め込め込んだ。だが、ここで完全に成し遂げられないのもまたエドワード。もう少しで逃げ切れるというところでヘマをする。そこからまた追いかけっこが始まる……以降延々とループした。

決勝という舞台での大胆な動きに、Ａクラスの人も翻弄されてしまったようだ。続々とＡクラスの面々に遭遇し、大勢を引き連れて大袈裟に立ち回ることになり、最後には狐狩りのように退路を絞られ、恨み辛みのこもった魔弾に倒れたそうだ。だが、十分な時間を稼ぎ出し、Ａクラスの人たちの体力を疲弊させてくれた。

Ａクラスの面々がＢクラスの拠点に到着したのはそこから数分後。フィールドの半分を使った追いかけっこに相当な時間をかけてしまった。

辿り着いた先には、第一試合で作り上げた砦の完成形が待ち構えていた。大きな土壁に、反撃用の覗き穴。巨大な城門は迫力があった。少しでも姿を晒そうものなら、即座に撃たれる雰囲気を醸す。

その光景にＡクラスの面々は開いた口がふさがらなかったようだ。どれだけ攻撃を与えてもびくともしない。大型杖で攻撃を与えられても動じない。エンジニアの数が多いだけはあり、修理の手が早かった。もは

や攻略の糸口がなく、Aクラスは手の打ちようがなかった。
Bクラスの士気は高く、リーダーも優秀だ。それになんと言ってもチームワークが良い。
自棄を起こしたAクラスの人が闇雲に城門へ向かって突っ込んでくると巨大な落とし穴が出現し、数名が落っこちた。
救助もままならないまま、反撃され追い返されてしまい、アレシアさんお得意のお嬢様笑いも聞けぬまま、Bクラスの勢いに飲み込まれAクラスの敗北が決まってしまった。

*

「うおぉぉ!!　やったじゃないかノーマン!!」
「ああ、どうだ!!　お前抜きでも勝ったぜ!!」
「やりましたよウェイン君！」
控室に戻ると全員が諸手を挙げて大盛り上がりだ。仲の良い者同士で抱き合い勝利の味を噛み締めている。
「お前たちっ！　よくやった！　優勝おめでとう！」
息を切らしてお母さんが入ってきた。自分のことのように喜んでくれている。
「はい！　ありがとうございます!!　皆の力を合わせた結果です！」
「ああ、最高のチームワークだった！　これまでの成果がしっかりと出たな！　私も嬉しいぞ！　これから二年と三年の試合になる。しっかりと見てよく学べ！　頑張ったな、お疲れ様！」
クールなお母さんが初めてクラス全員に優しい微笑みをかけてくれた。奇跡のような出来事に、再び全員が「うおぉぉぉ!!」と盛り上がる。ベストパートナーだったノイちゃんともハグを交わし、上出来な結果を心底堪能した。優勝を果たし、Bクラスの仲もまた一段と良くなった。記念して近いうちに優勝祝勝会を開くことになった。

一年の決勝戦は、余裕を以て昼前に終わった。続いて二年生のフラッグ大会がすぐに始まる。

正直、二年生は勝負になっていない。Aクラスが飛び抜けている……というか、エドナさんが強すぎる。

一年生の最短の試合時間は三十分ほどだった。敵陣地を見つけるところから始まり、相当数の人数をかけて攻略をする。よほどのことがない限り、相手の陣地は簡単に落ちない。

ところがエドナさんは索敵も撃破も一人ですべてをこなしてしまう。

戦わなくてもフラッグを手に取れるが、あえて全員を撃破していく。それなのに五分もかからない。ナイフ？　そんなのいらねぇ、腕一本あればそれでいい。それがエドナさんのスタンスだ。

（……防具がひしゃげているけど、大丈夫？　死んでない？）

そんなわけで、二年Aクラスと戦う相手は作戦や陣地構成に悩まなくて良い。

待ってればエドナさんが来るのだ。全員で魔女を止められなければ負け。

僕がやられたように、決死の覚悟で何人も飛びつくが、エドナさんの超速攻撃に弾き飛ばされている。まるで見えない壁にでもぶつかっているような弾かれっぷりだ。一般客はその光景に大喝采だ。

僕にカッコイイところを見せたい一心で、今回エドナさんはクラスのために控えるということをしなかった。その様子にホリーさんも苦笑いしていた。

勝利の秘訣を知りたいと？　作戦？　チームワーク？　そんなものは必要ない。『個の武』それがすべてだ。炎髪の魔女さえいればそれでいい……！

優勝はAクラスで決まっているためか、他のクラス同士の戦いも前線に拠点を設置して、攻撃10：守り0で全軍が入り乱れる壮絶な撃ち合いをしていた。生き残った者全員で相手の旗を取るという、これはこれで面白い競技になっていた。

二年生フラッグ大会はまさかの半日で終わりを迎えた。二年生は最短完全撃破記録を作ってAクラスの完全勝利で終わった。

一年生も二年生もほぼ全試合がスピーディーなバトルだったため、予定されていた日数をだいぶ余らせて

いるらしい。少し教官陣が焦っていた。

メインである三年生によるフラッグ大会は翌朝から開始された。

僕は三年生の知り合いがいない。純粋に競技を楽しむことになる。しっかりとした陣地作成。動きに無駄がない偵察。分隊を上手く利用した敵の囲い込み。これぞ軍学校！　見ていて感動してしまう。

一日目、二日目と違い、一挙手一投足にハラハラドキドキしてしまう。映像で見るとお互いの位置がわかるため、接敵寸前になると緊張感が跳ね上がる。

本来はこのような試合が理想のようだ。皆も集中して試合の行方を見守っている。……二試合目までは集中して見れた。本格的な動きも僕たちにはできない斬新さがあった。しかし、それが数試合ともなればダレる。他のお客さんも目頭を押さえている。三年間も学んでいると、個性というものがだいぶ削られるようだ。どのクラスもほとんどが似たような動きになっていた。集中力が続かない。なので僕も違う目線で見ようと思う。

「あれは～、レモンかなぁ？　いや……ギリギリリンゴ？　おっっ！　あれはメロンっ!!　だがまて……なにかがおかしい。くっ、産地偽装かっ!!」

「ウェイン君……なにを見てるんですか……」

ノイちゃんがジト目で見てくる。

「伝説の果実。ちなみにノイちゃんは旬までもう少しの早摘みメロン」

「……。」

「……だって、中身が変わらないんだもん。……最初のほうは面白かったけどさぁ」

「それはそうですが……だからといって……」

「自分なりに面白く見ようと思ったわけです。……おぉ!?　大きい!!　あんな人いたの!?」

防具の上からでもわかる大きな胸。鼻息が荒くなってしまう程だ。今日一番の反応をしてしまった。見たことのない人だった。

「ああ、あの人は三年生でも有名じゃないですか。寮長もしてますしね」

「そうなの？　僕は見たことないけど」
「ウェイン君ともあろう人が……？　メルさんって言うんですよ。お父さんが街のお医者さんで、お母さんが軍人さんらしいです」
「へー！　金色の長い髪が綺麗だ！　お淑やかそうだね」
「ええ、見た目はそうですね。お母さんも軍医らしいですし、戦場の女神ってところですかね？」
なにやら含む言い方をしてらっしゃる。嫉妬だろうか、ノイちゃんも十分に可愛いと思う。
「たしかにねー。本人もメディックさんみたいだし、お医者さん一家だね。ぴったりな感じだ！　いいなぁ、お近づきになりたいなー」
「……おっぱい狂め……」
ノイちゃんからの冷めた目に体に電撃が走る。ひゅー！　ゾクゾクするー！
そんなことを思っているうちに試合は終わる。
特筆すべき点はメルさんのおっぱいくらいしかない。……違う。メディックなのに最前線で頑張っていることくらいしかなかった。それくらい全体的な質が高く、とても良い試合だった。
三年生の試合も最後を迎える。結局三年生も一日の日程で終わってしまった。明日一日がまるっと空いてしまうこととなった。いったいどうなるのだろう。休みになったりするのだろうか。
三年生の優勝はメルさんが所属するC組を破ってD組が優勝した。総合的な能力差はなかった。運も味方の内というところだろう。頭の被弾が多く、治療できない生徒が多かった。前線維持に失敗してしまったのが敗因だろう。
そして、その日のうちに表彰式が始まった。
一年Bクラスからは、代表してノーマンが壇上にあがった。遠目から見ても映える姿だ。優勝者に相応しい。
二年Aクラスからは、エドナさん。これも文句はない。キビキビした動きがかっこよかった。
三年Dクラスからは……うん。見たことない人が受け取って喜んでいた。集大成だ。飛び跳ねるのもわか

る。
そして、各学年のＭＶＰが発表された。
「一年生からは二名だ。一年Ａクラス、セシル！　それと、一年Ｂクラス、ウェイン！　前へ」
まさかのＭＶＰだ。……期待はしまくっていたわけだが。
クラスの皆から「おめでとう！」と祝福されると、頬が緩んでしまう。ノイちゃんのにっこり笑った顔も嬉しかった。
「セシル君は、素晴らしい偵察能力と状況判断が評価された。ウェイン君は多彩な魔法技術と撃破数が評価された。……君はなぜメディックなのだね？」
アモスさんの小粋なジョークが笑いを誘った。会場全体がドッと沸き、大笑いしている。顔が真っ赤になってしまう。
「とても素晴らしい動きだったよ。これからも精進してくれ。二名に表彰状を送る」
アモスさん直々に表彰状を手渡された。
これも大事な思い出の一つになった。おじーちゃんに会ったときに自慢しよう。
二年生からはエドナさんが選ばれた。他に選びようがない。そして、三年生からはメルさんが選ばれた。僕以外全員女性だ。セシルさんは隠してるが、もしかしておっぱいで選んでるのでは？　……冗談はさておき、最前線での状況判断能力が高く評価されていた。戦うメディックさんが大人気のフラッグ大会であった。……しかし、ここでは終わらない。驚きの情報が伝えられる。
「予定よりだいぶ早く終わってしまったので、明日は今大会のＭＶＰたちとその他選抜メンバー対メイフィス軍学校教官による特別戦を開催する。ちょっとした余興だが、軍学校教官の素晴らしさを是非その目に焼き付けて欲しい。ＭＶＰの諸君、健闘してくれ給え」
アモスさんは楽しそうに笑い、壇上から降りていった。終わると思っていた大会がまさかの継続である。
表彰式が終わったあと、ＭＶＰたちは別室へと招集がかけられた。お母さんがやってきて詳細を説明してくれる。

「先程も言った通り、明日は私たち軍学校教官との特別戦をすることとなった。ルールも若干変わる。基本は一緒だが、教官側だけに旗を設置する。お前たちは全員がやられない限り負けはない。それと、エドナ。お前の強さは抜きん出ているので、私たちでも止めることができない。なので、一人特別に外部参加させてもらう……アイシャ！」

見知った名前の見知ったメイドが扉を開けて入ってきた。

「明日はこいつが私たちのチームに入る。というか、エドナと戦うことになる」

「ほぉ……アイシャと戦えるのか……」

「ふふっ、楽しみですね……エドナ」

二人の目に炎が灯っている。薄く見開かれた目に僕の姿は映っていないようだ。

「私たちはアイシャを入れて十一人での参加になる。お前たちは二十人まで参加可能だ。ＭＶＰ四人、それに生徒十六人だな。今から声をかけて明日に備えてくれ。作戦会議もしなければいけないだろうから、すぐに始めてくれ。では、明日は楽しみにしている」

お母さんは最後、僕に向けてウィンクをして出て行った。アイシャも僕に深々と頭を下げてお母さんについて出て行った。

「……僕の護衛が裏切ったよエドナさん……」

「ああ、裏切り者はあとで制裁が必要だな。しかしすぐに人を集めなくてはな……」

ここはやはり三年のＭＶＰであるメルさんに陣頭指揮を執ってもらうのが一番だろう。なにも言わずメルさんが喋りだすのを待つ。

お淑やかそうな雰囲気に綺麗で艶のある長い金髪。まつげも長くて目も大きい。サファイアみたいなきれいな瞳に吸い込まれてしまいそうだ。

「はぁ、目立つのは嫌いだってのに……めんどくせぇ……」

どっかから澄んだ声で口調が荒い人の声がした。いったいどこの誰だ。おっぱい会議にそぐわないぞ！

「はぁ……明日はサボれると思ったのによぉ……」

金髪美人の口がひん曲がった。……そんな……まさ

か。
「嗚呼……エドナぁ～、お前一人で全部やってくれよぉ……めんどくせぇよオレ～」
「すいませんメルさん、さすがにアイシャ相手ではそう易々と抜け出せません」
「なんだよ、お前にしては弱気じゃねぇかぁ。そんなに強えーのかあいつ？」
「ええ、けっこうな強者です。それにウェインからの……いえ、疲れ知らずなので強敵です」
「あぁ～、さらにやる気なくなった……。ウェイン、お前も強えーんだろ？　お前がやってくれやぁ」
　テーブルに肘をつき、やる気のなさそうなメルさんが不良言葉で問いかけてくる。どうしてだ……そんな見た目でどうしてそんな口調なのだ……。
「……あ、……はい」
「なんだぁ？　なに驚いてんだ？　オレにか？　新人歓迎会のときに挨拶しただろうが、聞いてなかったのか？」
「メルさん、ウェインは新人歓迎会に出ていません。……私のせいで」
「あ～！　そういえばそうだったなぁ！　そりゃあ驚くか。残念だったな～！　オレはいつもこんな感じだ」
　ニッと笑う顔は女神の微笑なのに、なぜそうも口調が荒いのだ……。
「母親の影響だから仕方ねーわな。男だらけの軍で口調が移っちまったらしーぜ？　それがオレにも移っちまったわけだ。――わはは！」
　大きく口を開けて笑ってらっしゃる……。凄く上品そうなのに……それに凄く素敵おっぱいの持ち主なのに……でもこれはこれで良い。
「まぁウェインは先輩の性格より、先輩の体に興味があるでしょうから、やる気を出させるならそっちがいいと思いますよ」
「なんだ～？　エロガキなのか？　別に勝たなきゃいけねぇわけじゃねぇからな～。必死にならなくてもいいんだけどよ……だが勝てるなら面白えか？」
「そうですね。先輩の大好きな愉快痛快が味わえるかもしれませんよ」

「まじか、じゃあそうだな～……。なら教官との戦闘において、オレを認めさせることができれば、一つくらいワガママを聞いてやってもいいかな～」
ぴくりと体が反応してしまう。
「……本当ですか？　……その命令はどこまでいけますか？」
「なんだぁエロガキぃ。面白えじゃねぇか……！　いいぜ？　お前が考えてることくれー丸わかりだ。ただオレを認めさせるのはなかなか大変だぜ？」
メルさんはニヤニヤしているが、俄然やる気が出てきた！！
「例えばどんなことをすれば認めてもらえますか？」
「そうだな～……オレのクラス担当官のアンディを倒すってのはどうだ？　間違いなく明日出てくるだろうぜ」
「アンディ……教官ですか？」
「ウェインも見たことがあると思うぞ。ストライダーの技術顧問だ」
「えっ……！　あのムキムキのサングラスの？」
「ああ、そうだ。魔法も凄ければパワーも凄いぞ」
あの人が担当官とか恐ろしすぎる。迫力だけで首を縦に振ってしまいそうになる人だ。
「どうだ？　怖気づいたか？　やめてもいいんだぜ？」
「……いえ、メルさんこそ覚悟してください。僕の要求は生半可なものではありませんよ？」
「はっ！　言うじゃねぇかエロガキ。明日が楽しみだな！」
見事にエドナさんが素敵な方向へと導いてくれた。僕のエロパワーの前には何事も通用しないのだよ！
その後、各々が四名ずつを選ぶことで一度解散になった。要は自分が分隊長となり、分隊単位で挑むことになるようだ。
では、人員確保へと参ろう。
「そこの筋肉！　ちょっとこちらへ来たまえ！」
「お？　なんだ？　呼び出しの件は終わったのか？　明日お前も出るんだろ？　応援するぜ！」
「ノーマンも出るんだよ。今から作戦会議するから、

第十一話　少年と一人旅

薄暗い街中を一人歩く。

いつもなら誰かしら隣にいる。腕を組んでくれる人もいれば、手を握りしめてくれる人もいる。中にはしなだれかかるように甘えてくる人もいる。しかし、今日から数日は我慢せねばならない。

軍学校から歩いて数分でバス停に到着した。向かう先はアンボワーズという鉱山都市で、その街でエイヴさんと待ち合わせをしている。

薄暗い街にバスの明かりが浮かび上がる。これから数度バスを乗り継がなければならない。

お母さんにくれぐれも寝過ごさないようにと注意されている。なんでも一つ間違えただけで次のバスの発車時間まで相当待たねばならないらしい。寝ないということは得意だ……きっと問題ないだろう。

バスの扉が開き、自由席に腰を掛ける。案の定誰も乗っていない。貸切もいいところだ。

発車ブザーが鳴り響き、バスの心地よい振動が始まった。揺さぶられながら朝焼けに照らされる街並みを眺めて、一人旅を満喫していく。

太陽が顔を出し、闇が追い払われていく。陽の光を浴びて景色に色がつきだした。新鮮な早朝バスに心を洗われていると、あっという間に到着してしまった。

入れ替わりで次のバスに乗る。次のバスは始発だった。一番に乗車する。乗った瞬間にバスは動きだした。他にお客は乗ってこないようだった。

二度目の乗り継ぎをする……。ここにもお客はいない。

三度目の乗り継ぎをする……。ここは全ルートの中で最長になる六時間は揺られるだろう。覚悟を決めて乗り込む……。誰もいなかった。

たしかに周りの景色は変わる。街を通り過ぎることもあれば、林の中、草原の中、山の中……それに小さな村々を通過していた。真新しい光景ばかりだが、いかんせん人がおらず大変寂しい。本でも持ってくるべきだったと、今更ながら後悔した。人もいないのに万

一に備えてバッグは両手で抱きしめている。
外を眺めること数時間……あまりの暇さ加減にあくびが出始め、うつらうつらとしてきてしまう。
（まさか！　24時間戦えます！　が座右の銘であるこの僕がこのくらいの眠気で……Ｚｚｚ……）
一瞬にして深い闇の中に意識を落とした。
ここ最近、お姉様たちとエッチし放題で、ろくに寝ていないことに気づいたのは後の事だった……。

花の甘い香りと、お日様の爽やかな匂いが鼻を刺激する。まどろむ意識の中、ぐらぐらと体が揺らされる。
伸し掛かる重さはやわらかく温かい。耳当たりの良い優しい声音が頭に響く。
「乗り換えの場所ではありませんか？」
言葉が頭に木霊し、瞬時に意味を理解する。一瞬にして現在地を確認し、慌てながらバスを降りた。危うく乗り過ごすところだった。
「すいません、ありがとうございます……！　大変助かりました」
「いえいえ、いいんですよ。私とご主人様は半身同体ですからね」
「ああ、そうですね……半身同体？」
バスが僕たちを置いて、次の目的地に走りだす。
「ねぇ……なんでいるの……？」
「そうですね……あのとき順番に眠っていったわけですが、起きるのはほとんど同時でした。きっと、異変を察知したのでしょう。全員が辺りをキョロキョロ見回し、ご主人様がいないことを知りました。そのことに騒いでいると、お母様が事の次第を教えてくれたのですが、エドナが心配だからと、いの一番に飛び出しました。お母様はさすがですね、あのエドナをがっしりと捕まえていらっしゃいました。他の方々はお母様に力で勝てる見込みはありません。それに、目的地も教えてもらえないままでは探しようもありませんからね。数日会えないことを残念がっておりましたが、お母様の説得により渋々納得していました」
「ああ……うん。それはあとで皆に謝らなくちゃいけ

ないけど……で、なんでアイシャは来れたの？」
「エドナという尊い犠牲を以て抜け出して参りました。移動は瞬光を駆使してご主人様を感じる方向に走って参りました。それと、お母様から伝言です『エドナちゃんとアイシャ、両方止めるとか無理！』だそうです……嗚呼、エドナっっ！」
腹黒メイドがヨヨヨと嘘泣きしている。
「そっか……まぁ、来ちゃったならいいんだけどね……僕も寂しかったし……」
「はいっ！　ご主人様ならそう言ってくれると信じておりました。これからは楽しい三人旅になりますね‼」
「三人……？　他に誰が……」
辺りを見回しても誰もいない。
「エドナさんが来るの？」
「たしかにエドナなら隙を見て飛び出してきそうですが……違います。大事に抱えてらっしゃるではありませんか」
あまりのナチュラルさに発見が遅れた。
僕のバッグはアイシャが担いでいた。僕の腕の中には、バッグの代わりに褐色少女がぶら下がっている。
適齢の子より大いに育った胸が腕に引っかかり、ぐでっとしている。苦しいと思うのだが、気持ちよさそうにグーグー寝ている。
「私より先でしたね。ご主人様の膝の上で気持ちよさそうに寝てましたよ？」
アイシャの瞬光より速いとは……！
「いつの間に……。まぁ寝かせておこう……まだバス旅は続くからね……」
フリーダを抱え直し、バスが来るのを二人で待った。
結局一人旅は半日を以て終了となった。本当は皆を驚かせたかったのだが、仕方がない。残念に思う反面、退屈を紛らわせることができる相手が来てくれて大変嬉しくもあった。ここからは退屈しない三人旅の始まりだ。
次のバスも誰もいない。貸切りの状態なのに二人並んで椅子に座る。
フリーダは僕の膝上に乗せ、抱きまくらにする。体

温が高く、大変触り心地よいので寝そうになってしまうのが難点だ。
「ところでご主人様……お母様からは少し旅に出たとしか教えられていないのですが、いったいなにをするのですか？」
「あっ、そうだね。ここまで来たら隠すこともないよね。……実は以前会ったエイヴさんにお願いして、発掘作業を手伝わせてもらうつもりなんだ」
「発掘作業ですか？」
今回冬休みの半分を使ってやることはズバリ『トレジャーハント』だ。僕がお母さんに「皆にプレゼントしたいので、お金を稼ぎたい」と、相談したところ「そういうことならエイヴに頼んでみる」という流れになった。
エイヴさんは快く僕の願いを聞き入れてくれた。今向かっているのはアンボワーズという都市だ。そこでお宝探しをやることになる。
アンボワーズにある迷宮は、以前から歴史調査やお宝発掘が続けられ、今に至るまで大変盛況な迷宮だ。
一般的な迷宮に入る場合、冒険者資格がないと数ヵ月前から申請せねば入ることさえできない。だが、アンボワーズの迷宮は特別に入ることができる。
洞窟に入ってすぐに迷宮の入り口があるらしく、古の街が丸々地中に埋まっているのではないかといわれている。奥まで進まないことを前提に、入場料さえ払えば誰でも入ることができ、発掘の許可が下りている。
完全攻略されているわけではないので、時折モンスターが出るらしいのだが、大きなコウモリが数匹という程度らしく、駐在している冒険者が簡単に倒してしまうのだそうだ。
掘り出される物は希少価値が高い物が多く、一攫千金を狙うトレジャーハンターが多いのだそうだ。危険度外視というわけではないのだが、掘り出される物の価値を考慮して解放に至っているらしい。
「ご主人様も一攫千金を夢見て、アンボワーズの迷宮へ？」
「いや、出たらラッキー程度なんだけどね。目的は今日を含めて一週間エイヴさんのお手伝いだね。発掘作

業だからけっこう重労働があるみたいで、働きに応じてお給料をくれるらしいんだ。もしお宝が出たら折半っていう約束でね」
「なるほど……。それで得たお金で皆にプレゼントを、というわけですか」
「そうだね。日頃皆にお世話になってるから、お返しがしたくて……」
「そういうことならこのアイシャ！　ご主人様のために精一杯お手伝いさせていただきます！」
大きな胸をボヨンと一叩きしている。
「うん……。ありがたいんだけど……アイシャもプレゼントの対象者なんだよ？」
「お気持ちだけで……と言いたいところですが、もらえる物はしっかりもらいたいと思います！　ご主人様からのプレゼントなんて興奮が鳴りやみませんっ！　一緒にお宝をガンガン発掘して、いーっぱい買ってもらいます！　とっても楽しみっ！」
普段見せない子供みたいな反応を見せる。周囲に人がいないので、きっと素の自分を出せているのだろう。
やはり一人で旅するより、誰かと楽しく過ごしたほうが楽しい。
片腕の中で眠りこけているフリーダを抱え、もう片方の手でアイシャの手を握りしめる。温かなアイシャとフリーダの体温がとても安らぐ。
「ふふっ、プレゼントのために頑張るのもいいですが、近くにいてもらえるだけで私たちは満足なんですよ？　無言で行っちゃうなんて今後はやめてくださいね……」
アイシャが僕の肩に頭を乗せてくる。優しい匂いが鼻に広がる。それに、安心するような波長が響いてきた。アイシャは僕の半身……体の半分を置いて駆け出してしまったのか。
「うん……ごめんね」
自分の気持ちを優先して、皆のことを考えていなかった。深く反省をしつつ、精一杯お返しをすることを誓う。
バスに揺られ一路アンボワーズへと向かう。

第十二話　少年とアンボワーズ

「おっ、ようやくのご到着か！　また少しでかくなったな！　あれ、一人で来るって言ってなかったか？……まぁ、いいか。ようこそアンボワーズへ‼」

半年ぶりに会ったエイヴさんはバス停で待っていてくれた。

相変わらずのナイスタフガイだ。前回より筋肉の付きが良くなっている気がする。

「お久しぶりです、エイヴさん！　今回はワガママを聞いていただきありがとうございます。これから数日お世話になります！」

「よせよせ、もう見知らぬ仲ってわけでもないだろ。今回は頼りにしてるからな！　がっぽり稼ごうぜ！俺も久しぶりに冒険者業の再開だ‼　お互い頑張ろうな！」

エイヴさんと固い握手を交わす。

お母さんがコンタクトを取ったらエイヴさんは即座に行動を開始してくれた。入場料や泊まる宿のこと、採掘用具や申請書類、すべてを整えておいてくれたのだ。お母さんは「ああいうことしかできないんだから任せておけばいいのよ」と相変わらずエイヴさんに冷たく言い放っていたが、こういう人は大事な存在だと思う。

エイヴさんに連れられて、今日から泊まる宿へと案内される。

そこは一階がレストラン兼酒場で、二階が宿になっている複合施設だった。遺跡で発掘作業をしている人であろう筋肉隆々の人たちが騒がしく酒を飲んでいる。

エイヴさんは、活気溢れる店内を走り回る給仕女性に声をかけた。胸元をぱっくり割らせた給仕服だ。エロい。

「いらっしゃいませ～！　空いている席にどうぞ～！」

「いや、違うんだねーちゃん。俺たちは宿泊客だ。受付はどこだ？」

「失礼しました～！　受付は二階になっております

～！」
給仕していた女の人は、頭を下げるとそそくさと行ってしまった。
喧騒の波をかき分け、階段を上ると小さな受付カウンターに一人の女性が座っている。
「宿泊の予約をしていたエイヴだが、受付はここで合ってるか？」
「ああ、いらっしゃい！　遠方からよく来たね！」
その女性はこの宿の女主人だった。恰幅のいい明るい人だ。酒場という雰囲気にもよく合っている。
「あれ、予約人数は二人だったはずだが……増えたのかい？」
「ああ、突然で悪いんだが二部屋取れないか？」
「今は部屋がいっぱいでねぇ……」
帳簿を見ながら女主人は困ってしまっている。突然人数を増やした僕たちが悪い。
「問題ありませんよ？　私はご主人様と一緒に寝ますので」
「……とのことなので、部屋は一つでいいや。金だけは三人分払う。飯は大丈夫だよな？」
苦笑いを浮かべたエイヴさんは女主人に尋ねている。
「それは大丈夫だ！」と笑いながら部屋の鍵をくれた。
与えられた部屋には、ベッドが二つにトイレとシャワーが付いており、空気入れ替え用の小窓が付いている簡素な部屋だった。窓から見える外の景色は異様なほど賑やかだ。たくさんの夜のお店が営業しているようだ。
「すまないな嬢ちゃん、おっさんがいて……まぁでも夜は基本いないから気にするな。このベッドを使っていいぞ」
エイヴさんは僕とアイシャにベッドを譲ってくれている。
「えっ、でもそれじゃエイヴさんが……」
「いや～……坊主が一人で来るなら一緒に連れて行こうと思ってたんだがな～。……まぁそういうことだから、俺は基本別の店で夜を明かすから気にするな！　ここはそういう店も多いからな。だから、この部屋は自由に使っていいぞ？　ちなみに……そういうことす

るなら換気だけはしろよな！　お前らの甘酸っぱい匂いなんて嗅ぎたくないからな!!」

エイヴさんはニヤッと笑い、手をひらひらさせて出て行った。

片方のベッドに未だ寝続けているフリーダを横たわらせる。この眠り姫はいつ目覚めるのだろう。

それにしてもアイシャが来なければそういう店に連れて行かれたのか……嬉しいような……危ないような。

「無計画に来てしまいエイヴさんにご迷惑をかけてしまいましたね……反省します」

アイシャは申し訳ないようにして俯いている。

「そうだね。エイヴさんには改めて謝ろうか……いや、発掘作業を頑張れば来てくれて良かったって言ってくれるはずだよ！　明日からやるはずだから頑張ろうね！　フリーダも寝てるから、今日は大人しく寝ようか。バスで座ってただけだけど、なんか疲れちゃった」

「はいっ！　そうですね、頑張ります！　明日に備えて早めの就寝ですね!!」

アイシャの手を引き、空いているベッドへ潜り込む。

細い腰に手を回し、豊かな胸に顔を埋める。アイシャの呼吸に合わせて胸が動く。生命の鼓動を感じ、心が安らいでいく。……だが、安らぐ気持ちはあるのだがどうにも違和感を覚える。普段裸に近い格好で寝ているからだろうか。

アイシャは普段通りのパツパツメイド服だ。この宿で給仕していた人同様の、胸元がぱっくり割れた過激な衣装だ。今では短いスカートでも平然と動き回り、鉄壁の防御を誇っている。

肌成分が足りないので、アイシャの深い谷間にさらに顔を埋め込む。鼻いっぱいにアイシャの甘い匂いが広がる。そういえばシャワーも浴びていない。

「ご主人様？　眠るのではなかったのですか？　なにやら情欲の波が……」

「うん……アイシャの匂い嗅いでたら元気になってきちゃった。それにシャワーも浴びてないと思って……二人で入れるかな？」

ベッドを抜け出し、備え付けのシャワー室を覗き込

む。あまり広くはないが、二人くらいなら立った状態で入れるだろう。
アイシャに「多分大丈夫」と告げると、二人で裸になりシャワー室へ入る。
半畳くらいのスペースしかないシャワールームは、一人で入ればなんの問題もないのだろうが、二人で入るとやはり狭い。備え付けられている洗剤でお互いの体を洗っていく。
ハリのある肌は弾力に富み、触り心地は抜群だ。アイシャの全身を手で撫で回す。
「あんっ！　ご主人様っ！　とても手つきがヤラシイですよ。胸ばっかりいじらないでくださいぃ……！」
エドナさんとほぼほぼ同じくらいのアイシャのおっぱいは、弾力もあり柔らかさもある。絶妙な揉み心地の素敵おっぱいだ。
全員がそうだが順調に乳首の開発が進み、コリコリとした乳首は存在感を示している。
「ふふっ、アイシャだって僕のモノを重点的に洗ってるじゃないか。それにこのおっぱいがヤラシイからだよ。いただきま～す！　ちゅぱっ……ちゅ～！」
さっとシャワーで泡を落とし、胸に吸い付く。
丸い形をしていた巨乳が卑しく尖るような姿に変わる。
いつしかこのおっぱいも母乳が出るようになって欲しいものだ。
「あうっ！　ご主人様ぁ‼　まだ母乳は出ないですからっっ‼　舌で促すような動きしても出ませんよぉ‼」
「んふっ！　日々の努力で出るようになるかもしれない！　刺激だけで出ちゃうような頂まで舌技を昇華させたいね！」
「神をも超える神業を覚えようとは、さすがご主人様っ！　……でも今はまだ出ないですから‼　甘噛みしないでぇぇ‼」
悶えるアイシャはとても良い。
二人きりのときは普通に目を開けるようにもなった。しっかりと目を開けるだけで、全然印象が変わる。
「ちゅぱっ……残念。いつしか白い液体を出させてや

る!!」
狭いスペースで胸を吸い続けるのも大変だ。
諦めて今度はアイシャの狭い膣中を味わう。胸の愛撫だけでアイシャの膣はトロトロだ。
「はっっ!!　うぅぅっっ!!　今日から数日の間は私とフリーダが独占なのですね」
「うん、そうだね。帰ったら皆の溜まったものを解放してあげなくちゃ……！」
「はい、頑張ってください。でも今は私の中をお楽しみください」
ギュッギュッとアイシャが膣を絞ってくる。あまり激しくは動けないが、長さを活かしてねちっこくピストンしていく。
膣壁をなぞるようなイチモツの動きに、エラが柔らかなヒダを擦りつけ猛烈な刺激になって返ってくる。
アイシャの弱点は知っている。膣中の中央付近、お腹側にある一部分だけざらっとした刺激がある所だ。ここを擦っているとアイシャはあっという間にイッてしまう。
発見したときはアイシャが快楽に飲まれる様が面白く、攻めすぎてしまったことがある。必死に快楽を耐えていたアイシャだったが、ねちっこい攻めに耐えきれず、最後は小水まで吐き出してしまった。「やめてって言ったのにぃぃぃ!!」とガン泣きされたのは良い思い出だ。
「あっ！　あぁっ!!　ご主人様ぁっ！　そこは駄目ですってばぁぁ!!」
「ここを擦るとね、アイシャの締めつけが凄くなって僕も気持ちいいんだ。ホレホレッ――くぅぅぅ!!　ほらね？　それに、もしここでおしっこしちゃっても、ちゃんと洗えるから大丈夫だよ？」
「ぐっ、くぅぅ！　そういう問題ではありませんっ！　そこばっかりは駄目なんですってばぁぁ!!　ひぐぅぅぅ！！！！」
腰がビクビクと震えだし、だんだんと快楽の波が強くなってきた。きっと、ここからは連続絶頂だろう。お互いが満足するにはちょうどいい。
「イッてる最中も擦りつけてあげるからね。僕もここ

に向けて射精しちゃうからっ！　そらっ、いくよっ!!」
「ぎッ！　あッッ！　くぅぅ!!　もぉぉ!!　駄目ェェェ!!!　――うぐぅッ!!!」
刺激から逃げようとするアイシャの腰を両手で抱え、一点を抉るように突いていく。ガクガクした震えが手に伝わってくる。
「そこはぁぁぁ!!!　うぎぃぃぃぃ!!　――イグッッッ!!!」
ぶるるっとした震えが伝わり絶頂の知らせを伝えてくれる。それでも擦りつけるのを止めはしない。愛液が絡まり、粘つく感触が腰に響く。
「ふぅ！　くぅぅ！　一度出すよっ！　くぅぅぅ!!」
Gスポットになっているところ目がけて射精をかける。吐き出される精子の固まりが弱点に降りかかり、それに反応したアイシャがまた絶頂する。
「はぁぁっ！　くぅぅ!!!　締めつけが凄いや……！　まだまだ擦ってあげるからね？」
愛液と精子が混ざり、さらに卑猥な水音を増していく。「駄目ぇ！　やだぁ！」と、声をあげるアイシャだが、片足は僕の腰にまとわりつき、弱点に当てやすいように腰を調整してくれている。
「明日からのためにいっぱい子宮に精子を溜めておかないとね！　出すよっ――イクっっ！」
「きゃぁん！　また熱いのがぁぁぁ!!　これでまたイッちゃいますよぉぉ!!　――ッックゥゥゥ!!」
抜かずの五発を決め込んで、ようやくシャワー室を出ることにした。
一度昂った気持ちはなかなか治まらず、結局ベッドの上でも交わった。
アイシャに「フリーダが起きちゃうから声を出しちゃ駄目」と命令し、アイシャの弱点を後背位で突き続けた。
必死に声を出さぬよう耐えるアイシャに心が滾り、腰が止まることはなかった。周囲に気を配るセックスは非常にドキドキする。最後は蕩け顔のアイシャの表情に満足し、イチモツを膣に挿れたまま眠りについた。

翌朝、エイヴさんが扉を開けたときに苦笑いを浮かべたのはご愛嬌だ。

＊

「よっしゃ、それじゃあまずは一日目！　発掘作業開始といきますか！　……と、言ってもだな、実は二人で申請してるから三人じゃ入れないんだ。どうするかな～」

元々用意されている書類は僕とエイヴさんだけだ。入場許可の書類がないと入ることはできない。

「本当に申し訳ありません……。お二人が入ったのを見届けたら追いかけましょうか？」

どうやら違法入場する気のようだ。女神を信仰していた者としてそれはどうなんだ……。

「聞きたいんだが、そのねーちゃんは働き手としてはどうなんだ？　メイドさんみたいな服着てるが、軍学校の生徒なのか？」

エイヴさんは今更ながらアイシャの存在を問うてきた。

「えっと……軍学校の生徒というわけではないです。いろいろ事情がありまして、僕の護衛をしてくれてます。働き手としてはわかりませんが、戦闘力ではお母さんと同じくらいか、もしくは上かです」

「ゞえっ‼　クリューエルより上なのか？　……正気か？」

本気か？　と尋ねて欲しい。驚くのも無理はない。巫女で、メイドで、巨乳おっぱいが、人外に届きそうなお母さんレベルまで強いなんてありえるわけがない。でも、ありえないが体現しているのだから仕様がない。

「力よりスピード派らしいです。試しにアイシャを見ててください」

アイシャに耳打ちして力量を少し見せつける。

凝視しているエイヴさんの背後に、アイシャは一瞬にして移動した。

エイヴさんは目を点にして辺りをキョロキョロ見回している。

アイシャがエイヴさんの肩をトントンと叩くと、大

袈裟に跳ね上がっていた。
「――うおっ!!　マジか！　びびった!!　消えたぞ……」
「まぁ、そんな感じなので一般人よりは確実に強いです」
「そうか……なら払う価値はあるかもな。良し、いいだろう！　行こうか!!」
エイヴさんは一人頷き、僕たちを連れて宿を出た。
夜が明けてまだ間もない。軍学校から遠く離れたこの街も冬の朝はとても冷える。夜は賑わっていた歓楽街も、今はひっそりと静まり返っている。木造建ての店舗が建ち並ぶ様は、遠い土地に来たんだなと痛感する。
僕の採掘道具はアイシャが背負っている。男の癖にというところだが、僕にも背負っているものがある。昨日から延々と寝続けている眠り姫だ。いい加減心配になってきているのだが、当の本人は「にへ～」と笑い夢を見ている。「ここ～……お兄ちゃんがぁ……かっこいいのぉ……えへ～！」と、何度もこぼしている。いったいなんの夢を見ているのか……。
人には見えない重みを背負い、朝焼けの街を歩きだす。
二十分も歩けば、迷宮の入り口が見えてくる。入り口横には簡易に設けられた受付が置かれている。
「おはようございます。ようこそアンボワーズ迷宮へ。書類はお持ちですか？」
早朝にもかかわらず、ビシッと髪を決めた丸メガネの男性がしっかりとした丁寧な対応で尋ねてきた。
「ああ、これだ。それと、最近朝が冷えるからな。……これで体を温めてくれ」
明らかに食料とは思えない袋を、書類に隠すように渡している。たしかに温まるのだろう……この人の懐（ふところ）は。
「……わざわざすみません。こういった気遣いをしていただける冒険者様にはとても感謝をしています。『三』名様で、受理致しました。こちらのバッジをお見せいただければ以降は料金がかかりません。あなた方に幸運があらんことを。それでは良い一日を……」

第十六話　少年と不死の王

椅子に座った状態のまま、ヴァンピールは手を振り払うと先ほどと同じようにグールが続々出てくる。ただ、今度は鎧の質が違う。近衛兵と言ったところか。今回は大量のコウモリも一緒だ。空と地から束になって化け物が襲い来る。

ヴァンピールに鋭い殺気を送っていたアイシャが、一歩前に出て周囲をひと睨みしている。

「――このくらい、どうということもっっ!!」

目を見開いたアイシャが、神速の抜刀で全方位へと斬撃を飛ばす。

グールとコウモリたちが一瞬にして切り刻まれた。まるで透明な網にでも引っかかったようなマス切りだ。

僕の目の前にも、その銀刃が通り過ぎた……。正直モンスターよりアイシャが怖い。

「おおっ！　人間の割にやるではないか！　出来損ないの我が眷属を一瞬か……良いな、とても良い。では、そうよな……手始めにジークリンデ、お前が相手をしてやれ……オクタヴィアは我に奉仕だ。気持ちよく観戦しようではないか……」

明らかに戦うような人ではないのだが、返事もなくジークリンデが階段を降りてくる。

手に持つ杖を投げ捨て、王冠も放り投げる。なにが起きるのかとよく観察していると、整った顔が異形のものへ変貌していき、口にはヴァンピールのような尖った犬歯が生え、背中にコウモリの翼のようなものが生え広がった。手袋の先からは鋭い爪が伸びている……変化していく様に開いた口がふさがらない。

「ふふっ、我ら闇の者を見ると、人間はいつもそのような顔をするな……我はその表情が大好きだ。オクタヴィア……胸を使って奉仕するんだ」

オクタヴィアは上半身の甲冑を外し、押し込まれていた巨大な胸を取り出した。鎧の下は、娼婦のような服装をしていた。胸の部分だけが露出している。

大きな胸は少し垂れているだろうか、下垂型の胸は大変柔らかそうだ。両手で持ち上げ、ヴァンピールの

イチモツを挟み込み、舌と胸で奉仕している。
「二十三世紀も使い込んでいるが、お前の胸に飽きることはない……。サイズ、質感、感度……どれもこれも一級品だ……」
オクタヴィアの頬を撫でている。
ジークリンデが突然空を飛んだ。あの翼は見せかけではなかったようだ。
それをアイシャは銀閃輝く刀で迎え撃つ。爪と刀が鍔迫り合いを起こしている。キンキンッと擦れ合う音が幾重にも鳴り響く。ただ、アイシャは本気といった感じではない。
「くっ……やりずらいっっ！」
魔の形相をしているが、見た目は完全に人間だ。アイシャも戸惑っているのかもしれない。
アイシャだけを戦わせるわけにはいかない……僕もやらねば……。
「ふふっ、貴様は『銃』を持っているのだな……久しぶりに見たぞ」
その発言に驚愕してしまう。おじーちゃんはこれを知っている者はいないと言っていたはず。
「どこで見つけたのかは知らぬが、我の若い頃……四〇〇〇年……いやそれ以上前になるか、そのときの主流であった武器だな。……当時の人間はその兵器を使って栄えさせた国を自ら滅ぼし、文明を衰退させていたな。愚かなことだ……我をそれで撃ってみるがいい。何度でもいいぞ？」
奉仕していたオクタヴィアをどけて、ニヤつきながら心臓に指を当てている。アイシャが戦っている今、躊躇はない。
心臓目がけて火付与の弾丸を撃ち込んだ。赤い軌跡を残し、弾丸がヴァンピールの胸に吸い込まれていく。
手に伝わる人を撃ったという手ごたえが忌々しい。
着弾と共に、ヴァンピールの上半身が跡形もなく吹き飛んだ。座っていた椅子に大量の血液が撒き散らされ、非常にスプラッターな光景が広がっている。
「……ふっ、はは！　なかなか威力があるな。炸裂弾とは……やるではないか」
弾け飛んだはずのヴァンピールが、いつの間にか以

前の状態に戻っていた。なにが起きたというのだろうか……。改めて弾丸を撃ち放つ。
　着弾と共にヴァンピールは弾け飛び、あっという間に元の状態に戻る。そして笑みを浮かべている。これが不死の王……。
「理解したか？　我の不死身を……我はこういう存在なのだ……。お前がなにをしようとも我を殺せない」
　僕の攻撃を受けて無傷の様に、自信満々のようだ。王と名乗ったからこその傲慢なのか。しかし、その自信が命取りになる。
「……そこの二人はどうしたんだ」
　攻略のための時間稼ぎをしながら、気になることを聞いてみた。
「こいつらは、元々ここにいた人間だ。姫と近衛騎士団団長の美しさに惚れて求婚してみたのだがな、国を挙げて大反対されてしまったのさ。我は思い通りにならないことが嫌いなのでな、好きにさせてもらったというわけだ」
「二人の意識が薄いのはなんでだ……？」
「ふふっ、長い年月で意識が薄くなったのではないか？　……冗談だ。もちろん当初は激しく抵抗された。我はそのような女も嫌いではないが、従順な女のほうが好きなのでな……。体のほうは吸血で縛り、心のほうは壊させてもらった。な～に、目の前で家族、知人、守るべき民を一人ずつ殺していくだけであっという間に大人しくなったさ。その後は反抗するたびに一人ずつ……。そうしたら、いつの間にか我ら三人だけになってしまった、ハッハッハ！」
　ヴァンピール一人に当時のこの国は滅ぼされてしまったというのだろうか……。
　無表情のオクタヴィアが僕を見つめてくる。なにか哀れみを含んでいる気がする。
「わかるぞオクタヴィア……お前の気持ちはよくわかる。人間……お前のような輩はこれまで何人も訪れた。迷い込んだ者、我を討伐せんと意気込んで来た者、誘い込まれた者……。ジークリンデやオクタヴィアは新しい人間が来るたびに喜び、そして悲しんだ。果敢に立ち向かう者は一瞬だ。逃げ惑う者はゆっくりとだ…

…。何百と機会はあった……だが、どれもこれも失敗だ。……ジークリンデもオクタヴィアも諦めてしまったようだな」

昔を思い返しているのか「くっくっく」と、愉快そうに笑っている。

きっとオクタヴィアは、僕もヴァンピールの手にかかり命を落とすに違いないと思っているのだろう。だが、僕はそう簡単に死んでやるつもりはない。自分のためにも、皆のためにも、そして、おじーちゃんのためにも……。

「吸血された人間はどうなるんだ……？」

「心とは反対に、我の思うままに動かされる。身体能力は跳ね上がり、肉体の衰えは非常に緩やかになる。食事だって簡単だ。血か精で補える。幾分血のほうが効率はいいがな。ふふっ、血のほうは主に我が摂っているからな……こやつらは我の精で生き永らえている」

ヴァンピールはグラスを持ち上げ、グイッとお酒を一飲みしている……唇の端に真っ赤な跡がつく。

お酒だと思ったあのグラスの中身は、人の血だったようだ。オクタヴィアたちが少しやつれ気味に見えるのはエネルギー不足といったところか……。

「なんだ、人間……オクタヴィアを助けたいのか？お前も英雄になりたいとでも思っている質か？」

ヴァンピールはひじ掛けに腕を乗せ、手の甲を頬に添えて愉快そうに尋ねてくる。

これまでの人間も同じようなことを問うた人がいるのかもしれない。

「そうだな……僕も胸の大きな女性は好きなんだ。そんな人が助けを求めていたら救ってあげたいと思うだろ」

「ふはは！　やはりお前もそうなのか……いいだろう。そういうことなら今回はオクタヴィアに相手をさせてやろう……殺れ」

オクタヴィアが腰に差している剣を取り出した。

アイシャが掘り当てた剣に似ている。細く、先端が尖った剣だ。

階段を降りるたびに胸がぷるぷる揺れている。殺し

合いが始まるというのに、目がそこから離せない。
数メートル離れた場所で立ち止まった。
「少年……私を恨んでくれていい……ひと思いにやってやるからな……」
ぎりぎり聞こえる声だった。やはり瞳に生気は感じられない。
「オクタヴィア……さん。もし、自由になれたらどうしたい？　死んで生まれ変わりたい？　それとも生き残ってなにかを成し遂げたい？」
問いかけるが表情に変化はない……ずっと地面を見つめている。
「……希望を抱くのは無意味だ……辛いだけだ……」
独り言のようにぶつぶつと呟いている。希望を抱けない命など、ただの拷問だ。今すぐ救ってあげたい。
「オクタヴィアさんに……また人の温かさを教えてあげるよ……。待っててね」
オクタヴィアさんの目が少し揺らぐ。
「……やめてくれ……」
オクタヴィアさんが大きく一歩を踏み込む、初動の速さはエドナさん並みだ。
しなやかに伸びる肢体を活かし、細身の剣を突き出してくる。
独特な形をしているその剣は、切っ先を向けられると距離感が掴みづらく、突進の迫力も相まって、大きく後方に飛び退いてしまった。
体勢の崩れをオクタヴィアさんは見逃さない。
突き出した体勢をいち早く戻し、即座に距離を詰め込まれ、回し蹴りをお腹に打ち込まれた。
打撃の重さ、早さはお母さんに匹敵している。鈍く重い衝撃がお腹に走り、勢いよく壁まで吹き飛ばされる。頑丈な石壁に体がめり込み、大きく砂埃が舞う。
「いつ見てもオクタヴィアの体術は素晴らしい。人間であった頃から抜きん出ていたが、吸血してからは圧倒的になったな。……それに比べてジークリンデは……いつまで戯れているのだ。……いや、あの娘が異常なのか……？　吸血後が楽しみだな……」

＊　＊

微笑みかけてくれた少年が、壁の中で気を失っている。

期待など最初からしていない。でも、優しい笑顔は私の心を少し癒してくれた。

あのヴァンピールから逃れる方法はただ一つ……興味を失われること。

今は只々、そのときを待ち続ける。どんなに傷めつけられ、どんなに辱められても、今はもうなにも感じない。飽きてくれれば捨てられるだろう。姫様と最後に会話をしたのはいつだっただろうか。

離れた位置で戦っている姫様が苦戦している……本来であるならば、すぐにでも助けにいかねばならないのだろう。でも、今は願う……その刃で姫様の首をハネてくれと。

私たちは半不死だ。首と胴体が離れない限り、死ぬことはない。

この少年は言った「もし、自由になれたらどうしたい？」と。やりたいことはたくさんある……いや、あった。しかしあの不死の王を殺さないことには始まらない……。希望なんて苦痛なだけだ……。少年……痛いだろう……すぐにとどめを……。

瓦礫に埋もれている少年に近づく……。

「ぐあぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁあぁ！！！！　――ぎぃあああああああああああああ！！！！！」

ゴォッという轟音と共に、つんざくような絶叫が耳に入る。

いったいなにが起きたというのか……。声のするほうを振り向こうとしたとき、私の体がなにかに搦め捕られた。

＊　＊

「うぉぉぉおおお!!　大迫力ぅぅぅ!!!　眩しぃぃぃぃぃ!!!」

極太の光の柱がヴァンピールを包んでいる。

「えへへ、ちょっと時間かかっちゃったけど、お兄ち

第二十一話　少年と屋敷とメイフィスの街

部屋には穏やかに眠る吐息と苦しそうなうめき声、それにペチンペチンとした肉が弾ける音が鳴り響いている。

眠ってしまっているのはメルさん、ドナさん、それにアイシャとカミラさんだ。うめき声をあげているのはお母さん、それにオクタヴィアとエドナさん。

あのあと、ギリギリで意識を保っているドナさんを犯していると、「ぅわーん!!」と泣き喚いたアイシャが帰ってきた。決闘で負けてしまったらしい。元々徒手格闘ではエドナさんに及ばなかったわけだし、得物を使えない以上こうなることはなんとなく予想がついていた。だが、負けた原因は他にもあったらしく、決闘中に快楽の波長が流れて込んできてまったく集中できなかったと言われてしまった。

ちょうど、ドナさんとメルさんと交わっていたときにぶつかってしまったようだ。それは申し訳ないと素直に謝罪し、服を脱がしていった。

言葉と裏腹の行動にアイシャは目を見開いて驚いていたが、一度イチモツを突き刺せば負けてしまったことを吹っ切るように快楽に勤しんでくれた。

ドナさんの代わりと言ってはなんだが、他の人が帰ってくるまで猛烈にアイシャを攻め続けた。

今日一日休んでいたとはいえ、疲労もまだあったのだろう。アイシャは早々に限界になってしまった。

それでも追いすがるようにアイシャの膣を抉っていると、今度はお母さんとカミラさんが帰ってきた。

四つん這いの状態でがっちりと押さえつけ、獣のようにパンパンと腰を振っている最中だった。

お腹がぽっこりと膨れたアイシャが「もうダメぇ、許してぇ……」と懇願している姿を見て、二人は凍りついていた。

広いベッドとはいえアイシャをドナさんたちが寝ているベッドに寝かしつけると、サイズもギリギリだった。反対側のベッドではフリーダも寝ている。このま

までは場所がないので、二人の手を引き、空いている部屋へ移動した。
別の部屋に着くなり二人の服を脱がせ、以前みたいに二人を重ねて犯し始めた。きっと、オクタヴィアとエドナさんの熱に当てられていたのだろう。二人も激しく求めてきた。
濃密な時間を三人で共有する。一週間ぶりの刺激に二人は直ぐ様甘い声をあげた。……だが、それも長くは続かなかった。お母さんにしても珍しく、早々に弱音を吐き出した。
僕としては一週間ぶりの期待に応えてもっともっとやりたいのだが、久しぶりの刺激に皆が早々にギブアップしていってしまう。すると、今度はオクタヴィアとエドナさんが部屋に入ってきた。二人共シャワーを浴びてきたようだ。石鹸のいい香りに包まれていた。ちょうどいいので、カミラさんとお母さんとの交わりを一時中断した。
話を聞けば、結果はイーブン。お互いに有効打が取れない熾烈な争いをしていたようだ。初めて一本を取れない相手を見つけ、エドナさんは大興奮していた。オクタヴィアに至っては、最強だと思っていた自分が恥ずかしいと少し落ち込んでいた。本気の戦闘形態になるわけにもいかないので仕様がないことだと思った。それでもライバルができて嬉しいと言っていたし、仲も良くなったようだ。それならもっともっと仲良くなろうと提案し、３Ｐをすることにした。
急な提案に乙女オクタヴィアが出てきて狼狽していたが、エドナさんと二人で攻めるとあっという間に艶やかオクタヴィアへ変身した。恥ずかし顔からの蕩け顔になるオクタヴィアに興奮し、油断していたエドナさんを強襲した。無茶苦茶をする僕に、あっという間に二人もダウンしてしまう。充実した決闘により体力が疲弊していたんだろう。
気づけばカミラさんは寝てしまい、お母さんもウトウトしだしていた。
オクタヴィアとエドナさんをベッドに寝かし、意識ギリギリのお母さんに確認を取り、背後から犯し始めた。一度吐き出すと、今度はオクタヴィアに、そして

エドナさんにとローテーションして三人の違う膣感を楽しみ……今に至る。

全員の股の間からだくだくと精液が溢れだしている。夕飯も食べずに交わり続け、快楽を貪っていたことに今更気づく。しかし、未だに僕のモノはギンギンに勃ちあがっている。自分のことながら大変元気だと思う。

三人共が同時に寝息をあげ始めた。相手もいなくなってしまったことだし、大人しく寝ることにした。

一番スペースが空いているフリーダのベッドに潜り込み、柔らかな感触を枕にぐっすりと眠りについた。

*

外の喧騒が耳に入り、パッチリと目が覚める。学生たちが自主訓練をしているようだ。

腕の中では幸せそうな顔をして寝ているフリーダがいる。周りの光景は寝たときのままだ。カーテンは引かれているが、キラキラと日差しが輝き、薄く部屋内を照らしている。隣のベッドを見れば誰もいない。ドナさんにメルさん、それにアイシャがいたはずだ。

ベッドから起き、身支度を整える。

とりあえず他の部屋も見て回ろうと部屋を出ようとしたとき、フリーダが背中に縋りついてきた。

前のときと一緒だ。一瞬のうちに背中にへばりついた。どんな移動術なのだろう。背負い直して、お母さんたちが寝ていた部屋を覗く。……そこにも誰もいなかった。

外に出てみれば太陽の位置は高い。時間を見てなかったが、きっとお昼を回っているだろう。

改めて考えると、皆がどこにいるか凡その検討はついた。それを目安に軍学校を出て、街中を歩いていく。

道中、何台ものバスが僕を追い越し、街外れに向かって走っていく。向かう先は例の屋敷くらいしかない。進めば進むほどに民家は少なくなるのだ。まさかと思いながら駆け足気味で向かう。

屋敷の前に着くと、たくさんの人の声が響いてくる。目まぐるしいほどの人の行き交いに目が回りそうだ。

門の前でポツンと立っていると、お母さんが僕を見

つけてくれた。
「おはようウェイン！　今さっき屋敷が完成したわよ～！　今は生活するための準備を整えているところね！　皆に手伝ってもらってるの」
　お母さんがフリーダごと僕を包み、完成した屋敷を眺めている。
「さすがダーナね～。朝一番には仕上げちゃったわ。俊足組には換金所を巡ってもらってお金の交換に行ってもらってるの。この街だけじゃ捌ききれないから、隣の街までね。他の人は屋敷の手入れをしているわ。とにかく広いからね～。部屋数は全部で二十近くあるそうよ？　大きな食堂に特大なお風呂が最高だったわ！　暖炉がある書斎なんて小さな図書館くらいのスペースがあったし！　嬉しくなってどんどん本を頼んじゃった。正当な浪費だからいいわよね？」
　お母さんは少しだけバツが悪そうにして笑っている。だが、全然良いことだと思う。「あるものは使わないと！」と同意の言葉を送ったら、ニコッと笑っていた。
　僕たち二人が住んでいた家とは断然スケールが違う。きっと、これからはここが拠点になるのだろう。……でも、今まで暮らしていた家も大切だ。
「お母さん……卒業したら向こうの家にも帰ろうね？」
「ふふっ、もちろんよ！　あの家は二人の大事な思い出が詰まっているもの！　決して蔑ろになんてしないわ」
　お母さんも同じ思いのようだ。とても嬉しくなる。
　完成した屋敷を感慨深く眺めていると、お母さんは業者の人に呼ばれてしまった。あまりに人の出入りが多いので、子供は外で待つことにした。
　フリーダを抱っこに移行し、門の前で邪魔にならない所で腰掛ける。開拓地は軍学校がある場所から見れば、少しだけ高い位置にある。急勾配と言うほどきつくはないのだが、それでも他の家よりは小高い位置にある。目線を伸ばせば遠目まで見渡せる。この街でも、まだ行ったことのない場所はたくさんある。この休み中にちょっと足を伸ばすのもいいかもしれない。
　周りから忙しく響く声をよそに、一人、のほほんと

ゆったりしたときを過ごした。

＊

三十人以上は入るであろう大きな食堂に色とりどりの料理が並んでいる。中央にはどでかいケーキも用意してある。いつぞやのクラス会のときより相当豪勢だ。

「それでは、この度の功労者である、ウェインとアイシャ、それにフリーダ……は寝てて、ダーナ……は酔っぱらってる。……まぁあとで個人的に感謝を述べるとして……とにかく二人共偉い!! お母さんとっても嬉しい!! ほんっっと～にありがとうね！ この家は私たち全員の家よ。皆の大切な家になるわ。素敵な思い出を全員で作っていきましょうね！ これからのウェインとこの家の発展を願って――カンパ～イ!!」

「「「カンパ～イ!!」」」

ホリーさんを除いた学校のメンバー、それと案内役を買ってくれたエイヴさん、それに屋敷を二日で作り上げたダーナさんも混ざって盛大にお祝いだ。全員が満面の笑みを浮かべている。

「おう、坊主ー！ 本当におつかれなー!! いやー、立派な屋敷だ！ まだ冒険者にもなってないのに、やっちまったなー！ でもま、それも冒険の醍醐味だ！ いや、それともお前の実力か？ まぁ、どっちでもいいわな！ ――わっはっは！ しかしこの酒うめー!!」

あまりのダーナさんの規格外っぷりに頭が痛いと帰ってしまったエイヴさんも、今日はすこぶるご機嫌だ。ダーナさん用とは別で用意してあるお酒をガブガブ飲んでいる。

「エイヴさんがいてくれたから成し遂げられたことです。本当にありがとうございました」

「わっはっは！ 美味しい思いをさせてもらってるのはこっちだからなー！ これからもよろしくな！ 二年後に正式にお前が冒険者になったらもっと凄いことになりそうな気がするぜー!! はやく大人になってくれよ～！ お前の成長を願って――カンパ～イ！ 俺も今日はたらふく飲むぜ～!! ほら、お前も食って飲

んで騒げ～!!」
　果物ジュースが入ったグラスと料理がてんこ盛りで乗っけられているお皿を渡される。
　言われるまでもない。僕だって嬉しくって今にも爆発しそうだ。ただ、先にもう一人挨拶しないといけない人がいる。
　その人は食堂の端っこを陣取り、空き瓶のタワーを作っている。
「ダーナさん、家を建ててくれてありがとうございました！」
「んあ？　おう！　フィーナの息子!!　お前のおかげで俺は天国だー!!　感謝なんていら～ん!!　このお酒もお前がくれたんらろ～！　ヒックっ、いや～美味すぎて手が止まら～ん！　――ぷはぁ、美味ぇー!!」
　宴会が始ってから数十分と経っていないのに、ダーナさんは一人別世界だ。
　朝の段階で家を仕上げたあと、お昼過ぎから一人で酒を盛っていたらしく、当たり前といえば当たり前なのかもしれない。
　ただ感謝はいらないと言われても是非に感謝をしたいのだ。グラスのお酒がなくなるたびに、トクトクとお酌していく。「飲んでも飲んでも酒がなくなら～ん！」とダーナさんは上機嫌だ。お酒のことは詳しくないが、近くにあるものをドンドンと入れていく。
「ぷひゃ～！　おう、フィーナの息子ぉ～！　お前もっ、飲め～!!」
　ダーナさんが明らかにお酒と思われるものを突き出してくる。飲んだこともなければ自分はまだ未成年だ。「ダメですよ～」と断っているが、酔っぱらいはしつこい。
　助けの目線を周りの人に送るが、全員が賑やかに近くの人と話をしているため、こちらにまったく気づかない。というか、ダーナさんのテーブルには大量のお酒が積まれてて見えないのかもしれない。
「おらっ、俺の酒が飲めんのか～！　ってか？　わはは、大丈夫大丈夫！　これは水だ水ー！　ちょーっと……ちょーっとだけ飲んでみろぉ？」
　酔っぱらいが心底頼りない情報を送ってくる。

ぐいぐいと寄せられるグラスを押し付けられる。あまりのしつこさに観念して、すこーしだけ口に含んでみた。
喉にスッとした爽やかな感覚が伝わる。それはまるで水のような清々しさだ。お酒という感じはまったくしない。
「わっ！　なにこれ……！」
「ぷはぁー！　だろー？　これは～……よくわかんねーが、ゴクゴク飲める～！　ほら、飲め飲めー！」
グラスになみなみと注がれる。溢れ出しそうな液体を思わず口で啜ってしまうが、やはりお酒という感じはしない。胃に落ち着くときにじわっと浸透するなにかがあるが、飲み心地は水そのものだ。ぐいっと飲み込んでも影響はない。
「ん～？　凄いなぁ、なんだろこれ？」
「んふふー！　まだまだいーっぱいあるぞぉ！　どんどん飲め飲めー！」
お酒といった感じがしないので、簡単に飲めてしまう。それに飲んでいくたびに水だと錯覚していく。

ダーナさんのテンションが高まり、今まで作ってきた作品のことを教えてくれた。
自分には皆目芸術センスはないので芸術家の感覚は捉えきれないが、それでも楽しそうに話をしてくれるのでこちらも楽しくなってきてしまう。弾むような話に手も止まらない。だんだんと美味しく思えてきた。
今度は僕のおじーちゃんの像を作ってくださいとお願いしたら快く返事をしてくれた。
お母さんが言うには好き勝手に作れないと断ると言っていたはずだが、問題ないのだろうか。頭がぽわんとしてきて体が軽くなった。それに愉快な気分になってきた。
像を作ってもらうために、事細かにおじーちゃんの姿形を伝えていく。しかし、ダーナさんはなにが面白いのか「わはは」と笑いながらそれを聞いている。だんだんとそのことに僕もおかしくなり始め、二人で爆笑をしているとなにやら辺りが騒がしくなる。
笑い合っているだけでおかしくなり、笑いが止まらない。

ガクガクと誰かに揺すられるが、ダーナさんがぼやけてさらにおかしい。頭の中にお母さんやエドナさんの言葉が反芻するが、よくわからない。地面もグラグラと揺れてきて、まるで揺りかごで揺らされているかの気分だ……。そこで僕の記憶は途切れた。

＊

ぼやける頭を振り払い、体を起こす……。そこは見たことのない部屋だった。何人用なのかもわからない長いベッドに、裸の女性が並んで寝ている。そして、漏れなく全員が幸せそうな顔をしていた。僕の横では、お母さんとエドナさんが寝ていた。

僕の気配にエドナさんが気づいたようだ。目をこすりながら体を起こし始めた。

「ああ……おはようウェイン。待っててな……すぐに……あむっ」

挨拶もそこそこに、朝の生理現象が起きているイチモツをパクっと咥えだした。

「あうぅ!!　っく……おはようございますエドナさん……」

「んむっ、ジュポッジュポッ……んちゅっ、れろっ、なんら、もうお姉ひゃんとは、んちゅっ、言っへくれないのか？」

舌で亀頭をくるくると舐め回しながら、不思議なことを言ってくる。

「お姉ちゃん？　うっ……なんのことですか？」

「んふーっ、覚えへないふぁ……」

朝の奉仕力が日々向上しているエドナさんに、まったく我慢が効かない。あっという間に精液がかけのぼってくる。

「もう、出ますよっ、最後は奥にっっ!!」

「んふっ、ああ、わかっへる。――ジュルルル！」

喉を使ったフェラチオはエドナさんが一番上手い。膣圧とは違う圧迫感に亀頭が押し潰される。

「出るっ!!　くあっっ!!」

エドナさんの頭を抱え込み、直接喉奥に吐き出していく。

ゴリッゴリッと喉が動くたびに、イチモツが締めつけられる。
大量の精液をすんなりと飲み込み、最後はイチモツにまとわりつくぬめりを舐めきって朝の奉仕は終了した。
感謝を述べると、今度は二人でお風呂場へ移動する。初めて利用する我が家のお風呂は壮観だった。
芸術と言わざる負えないダーナさんお手製のドラゴン石像の口から、熱々のお湯が出続けている。巨大な浴槽には大量のお湯が張られ、湯気が立ち昇っている。軍学校では水シャワーばっかりだったので新鮮だ。
一般家庭ではタンクの中にある水を管に通して利用している。水魔法使いがいれば問題ないのだが、いない家庭は役所へ申請して週一で補給してもらっている。お湯を出したいときは、湯を沸かす装置に火魔法を送り込み、そこに水を通してお湯にしているのだが、これは開発により次第に魔法を使わなくても利用できるようになってきている。
エドナさんの説明では、この屋敷も最新式の装置を使っているらしく、装置に魔法を送り込むことなくお湯が出せるようになっているそうだ。
それと水は山から引いていると言っていた。貯水槽も用意してあり、なにか問題があれば即座に切り替えられるらしい。なんとも至れり尽くせりだ。自分の家のことなのにまったく理解していない。
スベスベの木椅子に座らされ、エドナさんが全身を使って洗ってくれる。
「凄いお風呂だな～！　お湯も使い放題なんて凄いや」
「そうだな、さっきの情報も昨日酔っぱらったダーナ教官が自慢気に言っていたことなんだがな。ウェインは酔っぱらって早々に退場してしまったから知らないだけだ」
なにかを思い出すようにエドナさんが笑っている。
「それにしても昨日のウェインは可愛かった……。ウェインはお酒が入ると、とても甘えん坊になるんだな。女性陣が全員メロメロになってたぞ？」
「そうなんですか？　記憶がなにもなくて……。ただ、

お母さんが言ってたみたいな二日酔いっていうのはないんですけどね。あれは本当に水だった……」
死にそうなほどの頭痛はないのだが、記憶がないというのが本当に怖い。
「特にお義母様は腰砕けになっていたな。抱きついて耳元でコソコソ喋っている間は、ずっと悶えていた。なんて言ってたか聞こうとしたんだが、お義母様が近づかないで！　って絶叫するからな……。まぁ記憶がないウェインに聞いてもわからないか。それでもみんな昨日の夜は幸せそうだったぞ」
その禁止ワードはなんとなく想像がつく。たまに使うと猛烈な効き目があるあれだ。
背中を洗っていたエドナさんが正面に回り込み、大きくなっているイチモツを自分の秘部に添えた。
「しっかりとこれも洗ってやるからな……私の中で……ンンッ！」
膣中は愛液を纏っており、しっかりと歓迎してくれる。
朝の早い時間から、性生活を満喫していく。
「今日はいつにも増して積極的ですね……どうしたんですか？　――くぅう、凄い締まり！」
「んっ、あっ、んんっ、私もっ、昨日のウェインにっ、当てられてしまってっ、あんっ！」
べったりと抱きつき、回すように腰を揺すってくる。ヌチヌチと音を出し、エドナさんの膣感を楽しむ。
「エドナしゃん、お姉しゃんって甘えてきたんだ。私は一人っ子だったし、兄弟に憧れもあってな。可愛いウェインに胸のトキメキが収まらなかった。それとだな、多分昨日の夜は……ウェインしてないぞ。避妊魔法」
動きが止まってしまう。
「まぁ、当たり日の人はいなかったようだが、絶対じゃないからな。お義母様もこんな日くらい仕様がないって言ってたし、良いんじゃないか？」
あっけらかんとエドナさんは言い張るが、気が気じゃない。すると、お風呂の戸が開かれた。
「二人共早起きね～！　おはよう、ウェイン、エドナちゃん」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売)／FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

http://ktcom.jp/